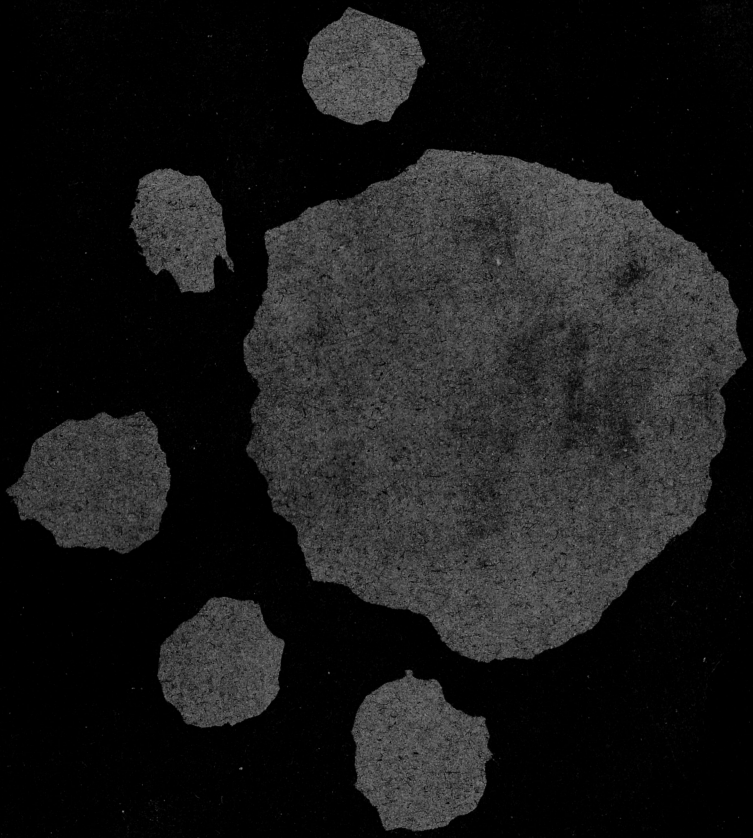


1964年4月11日

カブたいの　たんじょう日

三組　しか　龍茂久

カブたいが　生れた年、ぼくが生れた

カブたいが　大きくなると、
ぼくも　大きくなる

ぼくが、十才になると、カブたいも
十才になる

ぼくと　カブたいは
いつもいっしょだ。

ぼくの、行っている　カブたいは
れいなん坂教会だ

教会は、六本木からも　見える

ぼくの　行っている　教会は
りっぱだ。

１９５４年

１９５８年
山手地区ラリー

１９６０年
富士見キャンプ

1964年4月11日

いつも元気

ボーイ・スカウト　東京第四団年少隊
日本基督教団　霊南坂教会

目次

スカウトの皆様……小崎道雄 4
四国はじめてのカブスカウト
十六年前にカブスカウトが……飯田貞雄 6
いたはなし
十年のあゆみ……杉原正 8
世界のスカウト……高橋忠生 18
魅力の継続とその力……三島通陽 19
祝十周年……中山弘之 20
祝十周年記念……小城基 21
おめでとうカブ君……中村祐子 23
カブスカウト十年目の
誕生日にさいして……中正男 24
子供をスカウトに参加させて
……川田仁子 27
……田中宇一郎 28
カブ……杉田英彰 31
がんばれカブ君……今田富士雄 33
あと十年さきのこと……高橋弘長 34
カブの諸君へ……野崎英宣 36
ボーイスカウトの
底に流滅るもの……古矢紘一 37
会話……万石俊夫 戸田健治郎 39
イエス様のように……飯清 42
十のあしあと……日下部英一 44
カブにのぞむ……真木壮一郎 46
金魚のフンのチビ隊……井上毅 48
想い出……大内丘 50
やくそくとさだめ……加藤正夫 52
カブスカウトについて……柳下泰児 53
キャンプの想い出……平井真明 54
カブの思い出……青島務 56
秩父の思い出……川栄 57
なぜカブスカウトになったか……今井哲哉 58
カブのある隊集会……中村桃子 60
カブのおともだちブラウニーから
……まつざきやすこ 61
大きなあしあと……大和節 62
十周年をお祝いして……道下恒夫 63
金字塔の樹立……佐久間真幸 65
カブの思い出……志水功 68
みんなの声が……
一くみ 70

高島拡子……70
原陽一……72
川田夏夫……74
沢春生……73
及川修一……74
朱鴻梁……74
小達和男……75
五十嵐哲……75
杉田英彰……76
高田繁……76

二くみ

萩原昌子……77
河辺史郎……79
細谷悦啓……80
遠藤斗紀雄……80
小池四郎……82
伊藤勝己……82
須田治……83
高橋徹次……84
金森宗登夫……85

三くみ

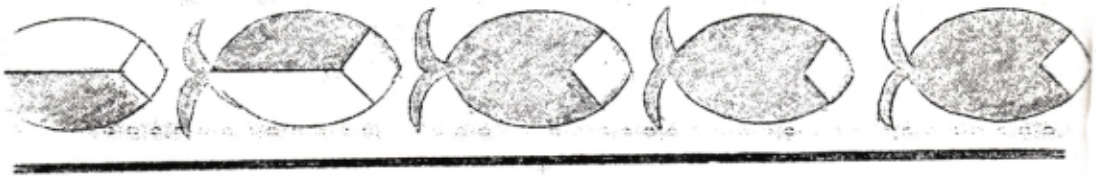
里見明子……86
杉田憲彦……88
高橋忠生……89
田中直也……89
御堀直嗣……90
龍茂久……90
遠藤友紀雄……91
佐藤一英……91
清滝信宏……92
北原陽介……92
新崎久美子……93
田浦彰……95
平井千明……95
坂井宏……96
守戸修……96
平岡和光……97
渡辺明夫……98
針替茂人……98

四くみ

五くみ

持地梓……99
石川圭一……101
清滝昌哉……101
大木勉……102
小玉純康……102
飯泉真行……103
信田雄一郎……104
手塚真……104
福田文裕……105
川田裕人……105

リーダーのれきし



スカウトの皆様

霊南坂教会名誉牧師
小崎道雄

十年を迎えたスカウトの皆様は、大きい使命と責任があります。欧米のスカウトは、ほとんど全部キリスト者の指導者によって運営され、その責任者も教会人であります。それはスカウトの大精神である「神と人とに奉仕する」は、聖書とキリストを信ずる人々にほんとうに理解されているからです。しかるに、今日の日本では教会をスポンサーとするスカウトは少なく、その他の宗教又は、無宗教のものが多いのです。そこで私どもは、このことを忘れず、最上のスカウトとなる秘訣は、この聖書と、キリストの信仰であることを隊員の全部に徹するように願います。そのためには、教会または、教会学校に出席して教会と聖書のことを学ぶことです。

私はクリスチャンとして、すべての人々を愛することを知っておりますから、他のスカウトの隊員に対して同じ敬意を持っております。スカウトの訓練を厳正にやらねばならないが、心の問題が一層大切でありますから

このことをこの機会に特に申しあげます。

スカウトの本部で隊員の信仰の重要性を認め、「宗教章」の制度ができました。あれを、充分研究実現して下さい。さいわいに、関西方面の教会が熱心にスカウト運動に立ち上がって、全国的にこの精神を徹底しようとしております。私ども、霊南坂は日本の、また、関東の大切な隊で、歴史と指導者に恵まれております。

どうぞ十年の歴史を反省、感謝して、これからの十年がもっともっと恵まれるよう祈り、皆様のよき理解と奮起を願って止みません。

（ボーイスカウト日本連盟相談役）

四団はじめてのカブスカウト
十六年まえにカブスカウトがいたはなし

少年隊隊長　飯田貞雄

ある土曜の午後、いつものように、教会の庭ではボーイスカウトの隊集会が開かれていました。旗あげ、「おきて」などのはじめの式がすんで、楽しいゲームがはじまりました。ふと、気がつくと、隊長のところに、それは小さいかわいい男の子と、その子のお父さんらしい人がやってきて何やら話しているのです。みんなは心のなかで、「あんな小さい子がボーイスカウトにはいるのかな。」と思ったものの、「でも、ボーイスカウトは六年生からだし、はいったって無理にきまっている。」という気持のほうが強かったにちがいありません。やがて、ゲームもすんで、汗をぬぐうひまもなく集まれの笛が聞こえました。そこで、隊長は「きょうから、ここにいる○○君がボーイスカウトにはいることになった。でもまだ小学校三年生だから正式のスカウトではない。みんな仲よくやってほしい。班は、わし班にはいることにする。……」といってさっきの小さい子どもを、みんなに紹介したのです。すると、その子は、ぴょこんと頭をさげてあいさつをしました。そうして、ニッコリとうれしそうに笑いました。

こんなわけで、ボーイスカウトのみそっかすになったこの子は、つぎの土曜日も、そのつぎの土曜日も、うちから教会まで一時間以上もかかる遠い道を元気にかよいました。

そのころは、いまのようなユニフォームがもちろんなかったのです。この子がスカウトハット（つばの広い帽子）をかぶってみると、ぶかぶかでちょうど、きのこのように見えたので大笑いをしたこともありました。

ところがどうしたことか、この子はゲームをやっても、うたをうたっても、なわむすびをやっても、なにをやっても大きい兄さんたちにまけないぐらいがんばったのです。たちまち四隊の人気ものになりました。六年生になって、正式にボーイスカウトになるころには、もうすっかりほんとうのボーイスカウトとしての心がまえや力をもっていました。そして、初級スカウトになるとすぐ、二級スカウトになってしまいました。これは、今から十六年もまえにほんとうにあったお話です。

みなさんは、この人をだれだと思いますか。この人は、きょ年まで年長隊の隊長をつとめて、今は外国へいって勉強をしている安積発也さんです。安積さんが四団でいちばんはじめてのカブスカウトといえるのではないでしょうか。いや、もしかすると四団はいちばん古い団のひとつですから、日本ではじめてのカブスカウトだったかもしれません。

（ボーイスカウト東京連盟第一地区コミショナー　山梨大学講師）

十年のあゆみ

年少隊隊長
杉原　正

十年一昔、時の流れの速さを感じつつ、その時のカブの顔を思い起こします。ひげも生え、たくましくなったスカウトは大学を卒業し、立派な社会人になってゆきます。私もただ古きを懐しむだけでなく、カブと共に進歩したいものと願っています。現代っ子のためのカビング、きっと難関につきあたると思います。しかし、十年を足がかりとしてカブを雑草に育てたい、決して温室育ちにはしたくないと思います。それには自分に打ち勝ってゆく強い少年を育てることが課題であると信じます。今までの歩みの間によき協力者を多く得たことを感謝し、今後も次代を背おってゆく少年たちのために限りないご支援とご協力をお願いしたいと思います。何が十年間私を支えてくれたかと、もし問われたら、「我れ生くるにあらず、キリスト我がうちにありて生くるなり」の一節であると答えるでしょう。キザないい方かもしれません。しかし、たった一人でよい、教会にあるスカウトに感謝し神をおそれる人間が生まれてくればと……。十年の歩みの一端をしるすために記憶をたどってみました。

二十八年

ボーイスカウトに入りたいという子供たちがふえ、その中にスカウトの年令に達していないかわいい子供が多勢いました。いまのようにテレビなどの娯楽対象が少なく、スカウト活動だけを楽しみにしている子供ばかりでした。そのため四団もカブを作らねばということになり、少年隊副長をしておられた志水さんを中心としてその準備に入りました。当時、私は隊付として少年隊にいましたが、遠山さんと共にカブをお手伝いすることになり、カビングの勉強のため急拠、指導者講習会カブ補講を受講することにしました。何しろ初めてのことばかりで、「デンデンデン」「いつも元気」と今までのスカウティングとは大部違っており、最後の終了式で「認」を授与されるまで緊張の連続でした。その時一緒だった指導者はほとんど現役として活躍しておらず、十年の才月が一番重要な時期に奉仕された方々を奪ってしまったことは寂しいかぎりです。

二十九年

目のくりくりとしたかわいい子供たちを集めて準備の集会がはじまりました。ユニフォームが着られないまま、白いシャツに黒の半ズボンのいでたちでカブラリーを見学し、僕たちだけが「おみそ」と、うらめしそうな目でカブにみられたことを覚えています。

六月、志水さんを隊長として正式にカブ隊が発足し、紺のユニフォームに黄の

ネッカチーフがよくうつり、僕たちもこれからカブの一員だという気持が顔にも動作にもあらわれていました。この夏、月の輪だけが少年隊のキャンプに参加し、なれない手つきでお米をといだり、工作をしたり、ボーイスカウトと同じように作業をしました。印象に残るのは、食器を利用しないでパンを作れという課題で、練った小麦粉を棒にまいて焼き、外側だけが真黒こげ、内側がまだ生のパンを、おいしいおいしいと口の周りを黒くして食べたカブのことです。この中には、オケン（少年隊、柳副長補）の顔もあったようです。この時、世話をされた志水、遠山さんはさぞかし大変だったことと思います。

三十年

寒い北風が吹くなかを、相も変わらず人民広場（現スウェーデン大使館の敷地）で元気な集会を行ない、組は一つの単位であって集会はほとんど隊集会でした。しげみあり、谷ありの野外を思う存分暴れまわり、負傷者続出の状態でした。今になってみれば、その方がカブにとっては楽しくておもしろいことだったのだなと思います。志水隊長が大学卒業と同時に北海道に就職され、思いもかけない大役が私にまわってきました。それまで表面にたつことの少なかった自分としては、この大役をどうやってよいかわからないまま舎営をむかえてしまいました。この年、カブとして初めての独立したキャンプであり、五日市の山小屋で三泊四日の生活を送りました。デンチーフの活躍によってプログラムを進行、山小屋のうす

灯りの中で見るカブの安らかな寝顔をみては、今日もやっと終わったという気持で、無我無中で舎営をすごし、またこの舎営を通じて組活動のいかに大切かを経験させられました。

三十一年

思いきって組集会を中心にと、組から一名のお母様に講習会を受講していただき、デンマザーの仕事をお願いしてみました。結果として家庭の協力は一段と強化されましたが、カブは部屋の中ではつまらなくなり、デンチーフは家庭での集会に出席が悪くなり、隊長として経験不足のためか何らの対策もたてないままに、デンマザー、デンチーフ、家庭という体別は一年たらずでくずれ去りました。私にとっては、すべて新しく経験したことばかりで、隊集会から組集会中心への移行期として一番苦しかった時でした。夏の舎営から、デンチーフを強化して組活動を活潑に行なうようになり、デンマザーというよりパックマザーとして大和さんが私のたりない面を助けて下さり、その時の体験が隊長としてこれまでにしてくれたと感謝しています。山中野営場での舎営は、野営場を全国のスカウトが利用しており、管理の方から各隊の活動を伺いながら、負けるものかと張り切ってキャンプ生活をしました。

三十二年

第四団創立十周年の年、各方面において忙しい年でしたが、カブはデンチーフ

の活動によって組活動がさかんになり、この年、級別訓練とか組の表彰制度を多いに活用し、カビングの向上をはかりました。箱根小涌谷の舎営は立地条件が素晴らしく広い敷地の中に、本館、そして点在する家屋、その一戸建の建物でデンチーフを中心として四日間の生活が始まりました。山あり、川あり、そして滝までがその中にありカブの活動にこれ以上恵まれたところはありませんでした。この年はじめて、月の輪は別の組を組織し、川崎、道下両君によって充実した指導をし、この月の輪がカブ隊初めての、リスから月の輪の課程を経たスカウト（現在大学一年生）で私にとっても印象深いスカウトです。このキャンプでデンチーフだけでは足りない点を痛感し、何とか活躍できるデンマザーを獲得しなければとの決心を私に与えてくれた舎営でした。

三十三年

組活動をスムースに運営するため、デンマザーを得たいと各方面に人選を依頼しました。渡辺（現高島）さんは教会青年会、萩原、里見さんは教会学校から、井出（現穎川）、新崎（現西木）さんは知人の紹介で、佐久間（現八木）さんはガールスカウトからと多彩な顔ぶれが努力の結果得られました。大和さんを含めて七名のデンマザーが六つの組を分担し活動を開始しました。最初の難関は日光の舎営、大変に条件が悪く、宿屋のように襖で仕切られた部屋のため、カブから目をはなすとすぐとなりの部屋の襖をガラリとあけて他の組をのぞいたり、また、

何事につけても相談し、助け合っていこうとするデンマザーにつれなくも自分の考えでやってゆくように忠告したことを覚えています。デンマザーにとっては初めてのキャンプでさぞかし心細く神経をすりへらしてのお手伝いだったと思います。この舎営において、デンマザーとデンチーフの年令の差、経験の差を充分考慮して任命を行なわなければならないと教えられました。

三十四年

今思い起こすと自分の至らぬことを示したことになりますが、意見の相異というのでしょうか、永年にわたって私を助けて下さった大和さんがシースカウトと共に第四団からはなれてゆかれました。この年カブ隊は創立五周年の大切な年であり、残された指導者は決心をあらたにしてこの難関をのり起えようと頑張りました。その五周年の記念として現在私たちが使っている魚のネッカチーフが京都の若松華子氏によってデザインされました。キリストが十字架を背おったように、私たちもキリストを背おってと、活動に励み箱根中強羅の舎営に出発しました。この年、とくに、個性の強かったカブが多く、キャンプファイヤーなどの出し物が今でも目に浮かびます。野儀、日下部両君が月の輪を担当し、私も隊長としてはじめて、ゆとりのある立場で、デンマザーがカブを指導している姿を観察でき、デンマザーの個性がカブに影響を与えることを知り、デンマザーの指導についての隊長の責任を感じました。

三十五年

隊付として頑張っていた日下部君がジュビリージャンボリーに参加して、留守の間に夏の舎営をむかえ、頼りにしていた遠山さんが仕事の都合で参加されず、急拠、古矢・大浜・岩見の三君にお手伝いを願い、天候に恵まれなかった富士見高原の舎営に出発しました。隊長としての私の不手際でこの年、デンチーフを任命しないままに活動を開始し、デンマザーの負担が多過ぎることがわかりながらも雨の中のプログラムをどのように進行させようかと思案にくれてしまいました。下見をしないでピクニックに出発してカブに叱られたり、風呂場が火事になったり、同宿していた女子高校生が下痢をおこしたのをカブではないかと心配したり、隊付のいうことをきかない月の輪を深夜、広い運動場の片隅にたたせてデンマザーを驚かせたり、とくに、新米の隊付に関するエピソードが多く、話題の豊富な舎営でした。舎営にお母様が参加して下さっていたことが女子高校生の下痢を早く発見し、カブの健康管理に役立ったことを覚え、舎営にはご父兄の参加が必要なことを教えられました。

三十六年

初めてユースホステルを利用して舎営を実施してみて、素晴らしいことばかりでした。秩父湖をのぞむ山腹に建てられた白い建物、みるものすべてが新しく、鉄筋コンクリートによる建物、頑丈に仕切られた部屋と二段ベット、清潔なお手

洗と風呂場、カブでなくても思わず「ブラボー」と叫びたくなるようなところでした。奥秩父の大自然を充分利用して組活動を行なうように指導し、ピクニックには、月の輪は三峯に、カブは秩父湖めぐりに出発しましたが、「キャンプまであと何マイル」と歌って歩いた険しいあの山道、今にも落ちるのではないかと思うほどゆれるつり橋、そして、ダム工事のためハッパの絶えなかを足元の不安定な二瀬ダムを渡ったこと、深夜、山奥の一軒家へカブはデンマザーを中心として組別に、月の輪は二人一組で肝だめし、山犬の叫び声を聞きながらのこのプログラムは、カブにとっても私にとっても自然の与えてくれた贈り物と、今もって思い起こされます。このプログラムによって、人は見かけによらないことを教えられ、次の活動に大きな役割りを果してくれました。

三十七年

毎年恒例のようになっていたテレビ出演をこの年、一三三団と共に小雪の降りしきる馬事公苑で行ないました。カブはテレビにうつるというので三月には珍らしい雪の中を半ズボンで日ごろの活動をみせたものでした。

七十名の参加者では狭すぎた秩父ユースホステルを参考に、一〇〇名収容の伊豆大室山伊東ユースホステルを貸切ることに成功し、ゆったりした舎営を行なうことができました。舎営は今まで水泳の達人が指導者にいなかったせいか山の中が多く、今年は伊東に来たのだからと、近くの川奈海岸に水泳に出かけました。

下見のときより波が荒らく、しかも急に深くなっている所が多いので、指導者が海中でバリケードをつくり、カブにペアをつくらせてこわごわ海に入らせました。泳げるカブは以外に少なく、活動の中にも組み入れていかねばならないと思い、また、指導者の好き嫌い（得意、不得意）が活動内容に入りこむことがカブに対して相当影響があることを痛感させられました。

三十八年

いよいよ十年目の活動に入り型の上では体系が整っていても、隊長、デンマザー、デンチーフ、その中の誰でもその一役が手を抜くと、その活動が充分に効果を発揮できなくなることをあらためて反省させられます。デンチーフをどのように用いるかによってカビングがカブのものになるか、大人のものになってしまうか、この年の舎営において、そのデンチーフの天分、デンマザーと役務の分担による成果を顕著にあらわしたようでした。おのおのその立場、分担を充分理解してその任をまっとうするよう努力しなければなりません。同時にその任にあたる指導者は、いつも健康も精神もベストコンディションにしてカブに接してゆかねばならないこと、決して安易な気持であってはならぬことを十年目の危険信号としてゆきたいと思います。永年にわたっていると物事に安易さを感じ、人間がその成長に必要な努力をやめてしまいます。ともするとその謙遜さを忘れ、また自分自身を忘れさってしまうことがあります。私自身そのことを一番恐ろしく感じ

ています。

（ボーイスカウト東京連盟第一地区副コミッショナー　国際キリスト教大学職員）

世界のスカウト

くま
高橋忠生

青い大空、せいふくも青
みらいをちかうぼくら
世界のスカウトは
みらいに向って
元気よく、走って行く

かがやく太陽、小リスのバッチ
ぼくらは、明かるい
元気なスカウトだ
宇宙にはばたく
よいスカウトを作ろう

魅力の継続とその力

ボーイスカウト日本連盟総長
三島　通陽

一口に十年は一昔という。が、さて、その任にあたるものにとってこれは決してなまやさしいものではない。いや、なまやさしいものであってはいけない。すぎ去ってみれば、それはもうかと、早かったなと思えることでもあろうし、その継続のさ中にあっては決して早いものではなかったであろう。その継続ということが、また、この教育にとっては実に大切のことである。というのは、この教育には興味がなければ継続は困難であるし、また、効果も少ない。ことに、カビングにおいてはその魅力の継続ということが最も大切なことであると思うからである。ラリー・スカウト（スカウティングでいえばジャンボリー・スカウト）やパレード・スカウトということは、意味がない。真に身についたカビングこそ、真のスカウティングでありこれは継続によってのみ、「身につく」ものであり、身につくことは習い性となることである。ここにカビングの尊さがある。十年前に初めてカブに入隊したものが、今はシニアからローバーにもなって、しかも継続している者が多いこの団のスカウティングの成績は、大いに上がっているものと私は大きな賛辞と、そしてその道のための感謝を捧げたいと思う。私はカブから

スカウトの年令のころ受けた乃木さんの教育が、今ごろしみじみ思い出されるのは真の教育の強さ、長さを思わされることである。この四団の子供らも大きくなって、あるいは老人になってからもその教育の大きかった、また、楽しかった思い出になるであろうと信じる。初代後藤総長が、なくなられる直前に私にいい残された「金を残して死ぬものは下、仕事を残して死ぬものは中、人を残して死ぬものは上」との名言を、第四団の十周年を祝して、また、将来の弥栄を祈念して、もう一度この言葉をお伝えしたい。

祝十周年

ボーイスカウト東京連盟第一地区委員長
中山　弘之

ボーイスカウト東京第四団カブ隊のみなさん、おめでとう。こんど十年のよき年を迎えられるにあたり、謹しんでお慶び申し上げます。

一口に十年と申しますと、大変短いように思われますが、その長い間につちかわれた、みなさんの第四団は、東京でも屈指の恵まれた環境と優秀な指導者のもと、つねに各団の先頭に立ち、優秀な団として輝かしい伝統を築いてきました。これは、実にご父兄の力強いご後援と、優秀なリーダーの指導と、そしてみなさ

んおよび先輩スカウトのたゆまぬスカウティングへの精進であると思います。
私の団もそうでありますが、多くの団は第四団を目標に常に励んできました。
これからもそうであると信じます。
先輩の築かれた輝かしい伝統をどうかみなさんは受けつがれ、一生懸命スカウトの道に努めて下さい。そして、第四団のみならず、日本のスカウトの指導者として活躍されることを念じています。
第四団が永久に弥や栄えますことを心より念じております。
最後にご活躍下さっています団委員の各位、また、常日頃、多大の犠牲を払い奉仕して下さっていますリーダーの諸兄姉に限りなき感謝と尊敬の念を抱いてペンをおきます。
弥栄

（ボーイスカウト東京連盟理事）

祝十周年記念

ボーイスカウト東京連盟山手地区委員長
小城　基

私は、よい妻を持って幸せでいます。もう四年すると金婚式がやれます。腕一本で人生を開拓してきた貧しい私の伴侶として、パリに十数年の画学生の乏しい

生活に、よく耐えながら、よく子供たちの教育に心をくばり、立派に社会人として世に出してくれました。そして現在も、百数十名のスカウト達を何くれとなく世話をして、親たちから、感謝されております。私の団のデンマザー達は、自分の将来の姿の目標を、私の妻においているようです。私がスカウト運動に精進できたのも、妻の理解と協力――そして陰の援助奉仕があったからだと思います。

山手地区が発足した十四年前、初代から一昨年の改組まで十年以上地区委員長として、奉仕してきましたが、いつも東京連盟のトップにたち、拡張に拡大を重ね活潑な動きを見せてきましたのは、ひとえによき協力者があったからであります。そのとき協力者――つまり私にとって妻とも思える立場にいてくれたのは、実に第四団の三人の指導者達であったのであります。すなわち、今田富士雄君、飯田貞雄君、杉原正君、この三人の理想的スカウト達は、地区の重要なポストで役務を推進してくれ、その効果を最大に上昇してくれました。また、指導者養成講習会を開催する時は、BSにしろCSにしろ、すべて私の副として全く意気合致した楽しい講習会としてくれました。私と組んで受講したリーダーは八百人近くなっています。

四団のカブ隊が十周年になったことを聞き感慨無量です。お目出とう。

今や連盟の地区編成のため、私と四団の皆さんとは組織の上で離れ、別れてしまいました。私の淋しい気持はたえられないくらいです。私は、実はしょんぼり

して心のはりを失いつつあります。皆さんは若い。グングンと開拓して行って下さい。私は静かに、「いかに美しく老いてゆくか。」を考えてゆきましょう。

（ボーイスカウト東京連盟理事
ボーイスカウト日本連盟名誉会議議員）

おめでとうカブ君

第一三三団年少隊副長
中村裕子

十星霜祭、ほんとうにおめでとうございます。

「十年は、ひと昔」とか。オギャーと生まれた赤ちゃんが、スクスクと育って小学校に入学し、立派なカブスカウトになれる位までの年月、そう、ちょうど今のカブ君たちが生まれたころ、東京第四団のカブ隊も生まれたのですね。このような長い間ですから、時には風邪をひきそうになったり、けがをすることもあったでしょう。生みの親、そして、育ての親としての育成会の方々や、リーダーの方々には、ちょうどご両親のようなもので、そのご苦労、ご努力は、はかりしれないことと思います。

東京にも、たくさんのカブ隊が出来ましたが生まれた順からいっても、四団のカブ隊はトップグループですし、私ども、一三三団が一昨年の春、NETの録画

でご一緒し、お訪ねもしましたが聞きしにまさる素晴しい隊だと感心して帰ってまいりました。のびのびした元気なカブ君たちで、うたもたいへん上手でした。そこで我が一三三団も、大いに奮気（ハッスル）したようですが……。また、ご一緒のチャンスがあればと、楽しみにしています。

世界のスカウトの仲間だということは、とてもうれしいことです。その上、過去においても、現在においても大いに活躍している立派な団だといわれる四団のスカウトの皆様はたいへん幸せだと思います。しかし、将来さらに素晴しい団にするのは、あなた方です。ここまで立派に育てて下さった先輩の方々に感謝するとともに、将来のためご活躍下さい。

私どもは、全世界のスカウト達とともに十周年を心からお祝いし、今後のご発展をお祈り致しております。

東京第四団カブ隊　イヤサカ！

カブスカウト十年目の誕生日にさいして

第四団団委員長　田中正男

カブスカウトが東京第四団に生まれて今年で十年、まずもって、お目出とうと

申し上げたい。

十年一昔というが、十年ということは、竹の一節のように一つの区切りであると考え、ここで過去をふり返って将来の飛躍に対する心ぞなえとすることは、意義あることであろう。

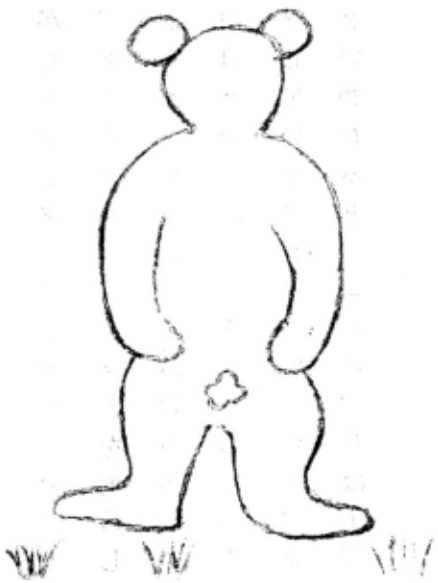
東京第四団は、日本基督教団霊南坂教会が育成するクリスチャンスカウトであることを知らない人はないと思う。しかし、クリスチャンスカウトを実行している人は、はたしてどの位いるであろうか。ボーイスカウト生みの親のベーデン・パウエル卿は、スカウティングは教会生活の日々の実行であると述べているが、なるほど、日曜日に教会の礼拝に必らず出席しているスカウトはいても、キリスト教の精神を日々の生活に生かしている人といわれると、「ハイ、私は実行しています。」といえる人は少ないであろう。

スカウティングが、ただ、技能章ほしさのための技能の修得や、服装にあこがれたり、興味本位で集まってくる人達のものに終わったなら、うわべだけのスカウティングであって、真のスカウスであるとはいえないであろう。

また、スカウトではよく奉仕という言葉が使われるが、この奉仕もただ単に、鉄道や郵便のような公共奉仕と同じ意味にとられるなら、これも間違った考えであろう。教会の礼拝のことを英語でサーヴィス（奉仕）というが、神に仕えることが奉仕であり、神のみ心を表わすことを通して、地域社会に奉仕することを考

えねばならぬと思う。スカウティングは教会学校と同じように教会教育の一環であり、ただ、技能だけを身につければよいのではなく、この修得した技能を神の奉仕のために生かして、始めて真のスカウトといえるであろう。これから先、ますます、チャーチスカウトとしての真価を発揮してもらいたいものである。

（早稲田大学教授）



子供をスカウトに参加させて

川田仁子

故ケネディ大統領の未亡人、ジャクリーヌ夫人が、「子供を上手に育て上げることが出来なかったならば、他のどんなことができても価値のないことであろう。」とおっしゃった、とか聞きました。私も、まったく同感であります。しかし微力な私には、母として、「立派な、良い子」を育てる自信がありません。したがって、学校の良いところを選び、また訓練の場として、ボーイスカウト生活をさせることをきめて、責任の一端を果たすことにしたのであります。ボーイスカウトの中でも伝統のある、優秀な隊とたずね、東京第四団を知り、入隊を希望したのであります。長男は小学校四年生から、次男は小学校二年生から憧れの東京第四団カブ隊に入ることを許され、その生活を楽しみつつ歩んでいるわけであります。他の隊の事情や様子を全然存じませんので比較することは冒険と存じますが、パレード、その他の行事のおりに、多少他の隊と比べてしまいます。その正々堂々の行進ぶりには、つい、大きな声で、「家の子の隊ですのよ。」といいたくなりますし、「隊長、ハンサムでしょう？」と同意を求めたくなりますし、また、「どう、デンマザーたち、教養の高さが自然に、にじみ出てるでしょう？」と花嫁候補生たちを売りたくなる私です。お陰様で肩身を広くいたしております。

終わりに苦言を呈することをお許しいただけるならば次のことを二、三申し上げてみたいと存じます。カブを出て上に進むに従ってその団体生活に関して多少の危惧のあること。――すなわち東京第四団として考えた場合、上級の方ももっとよくしていただきたいこと。時間励行をすすめていただきたいこと――とくに、遠足などの行事や父兄会のおりなど。宗教的色彩をもう少し強く出してほしいことなどを希望いたします。さらにめざましい発展をされることを期待し、祈りつつペンをおきます。

田中宇一朗

十年一昔と人々はいっておりますが、早いものでボーイスカウト東京第四団カブ隊誕生以来すでに十年目の誕生日を迎えましたことは本当にお目出とうございます。

私どもとしては、入団以来、未だ日も浅く感想文など先輩方をさしおいて、とても書く柄ではありませんが、子供が二年間お世話になって、心身ともに健康になったことの感謝の気持とお祝いをかねて紙面を汚させていただきます。私の子供を霊南坂教会カブスカウトに入隊させた目的から話を進めます。

一つには、信仰心を養える場所、それは昔、妻が聖歌隊にいたことのある当教

会が適当と思いました。強制的に無理に教え込まないでも自然の中に神に対する信仰心を身につけて行くものと信じております。また、一つには、規律正しい行動、はっきり応答できる言語と態度、頑張りの精神などを少年の中に訓練し、正しい道へ導いて行くスカウトに同調したからです。

さて、私は仕事の関係で毎土曜日の集会には、なかなか出席できず、集会の内容などは子供から時折聞く程度で、あまりよく解りません。しかし、親として子供の訓練をどのようにして行なっているかを知っておく必要があると思い、幸いにも、伊東のキャンプと富士のキャンプに参加することができましたのでゆっくり見学いたしました。

私は戦前、海軍飛行隊におり、苦しい訓練を受けてまいりました。現在の人々は、昔の軍隊を「暴力」とか「絶対服従」とか、いろいろ非難されておりますが、決して悪い面ばかりではありません。非常によい面も沢山あります。例えば一つの目的に達したら一休みせず次の目標にむかう頑張りの精神、行進途中で疲れても隊列を乱さず規律正しく自分勝手な行動を取らない、そして、それらの烈しい訓練の中に自然に精神が養われて、また同時に、友人同志互に助け合い思いやりのある生活が営まれて行きます。しかし、現在の子供たちにすべてとは思いませんが、少しでもよい点が取り入れられればと希望を心に秘めながらカブ隊の行進を見つめておりました。

真暗なやみの中でのキャンプファイヤーの光に浮き彫りにされた子供たちの赤い顔々々、そして、そろった可愛いい歌声が二年後の今日までも楽しい想い出として、心の中に残されております。また、普段は歩くことの知らない子供たちもキャンプでは、年令を考えずよくもあの長い距離を歩いたものと、今更ながら感心しており、また、家庭においては、あまり食べぬ食事もクマさん並にペロリと平らげる次第、本当に訓練のおかげです。子供たちの心の中にも苦しみがあって始めて楽しい想い出となることでしょう。今後とも機会あれば少しでも多くキャンプに参加し、子供たちと一緒に楽しい生活を送る心掛けでおります。キャンプをかえりみて痛感したことは、少ない費用で最大のキャンプを進行させる指導者方の苦心です。今後とも続いて行なうキャンプですので、許せる限り少しでも多くの費用を出し合い、最高のキャンプができるよう、心から協力を惜しみません。必らずや子供たちにプラスになることでしょう。また、カブ隊員も、隊員の名に恥じぬよう、隊員の「さだめ」をよく守り一生懸命訓練に励むよう、せつに希望して止みません。

カブ

りす
杉田英彰

カブッていいな
大きくてやさしい
たいちょうがいるんだよ
デンマザーもいるんだよ
いろいろわからないとき、やさしく
しんせつにおしえてくれる
だいすきなおねえさん
デンチーフもいるんだよ
ちょっと小さなおにいさん
ぼくたちとすもうとったり
あそんだり、たまにけんかもする
カブッてとってもおもしろい

春や秋にはピクニック
夏にはキャンプがあるんだよ
のはらに、海に、みずうみに
山にもたくさんいくんだよ
土よう日は、しゅうかいがあるんだ
いろんなことをならったり
おもしろいゲームをやったり
とっても、とってもたのしいんだ
カブにいくのがうれしくて
土よう日のくるのがまちどおしい
カブってとってもすてきだな

がんばれカブ君

青年隊隊長
今田富士雄

カブスカウトの皆さん、誕生日おめでとう。十年というと短いようですが、そのころのカブスカウトが、もうローバーになって、四団のためにいろいろな仕事をしています。

カブ隊ができたのは、ちょうど私が少年隊の隊長をしていた時でした。当時、私達の仲間は、スカウトに入って七年目でした。今アメリカにいる荒垣さん、名古屋にいる前副団委員長の小崎さん、現少年隊長の飯田さん、それから北海道にいる志水さんがそれぞれ力を出しあって四団のためにいっしょうけんめいやっていました。当時は少年隊だけでしたが、だんだんと、人数がふえてきました。そのうちに、今のカブの年令の人たちも、ぜひ入隊させてもらいたいという声が大きくなってきたので、いろいろと考えました。とにかく、カブの集まりをもとうと考えて、志水さんにお願いすることになりました。もちろん、杉原さんにも手伝ってもらったわけです。そしてカブ隊ができ上がりました。志水隊長は、一年で北海道に行ってしまわれたので、現隊長の杉原さんは、大変な努力を重ねられて、現在のこの大きな、力強いカブ隊を築き上げたのです。それだけではありま

せん、隊長と一緒になってカブ隊をもりあげてきた人々の中には、立派なデンマザーがたくさんいました。現在も引き続いてカブ君のために、自分の時間をなげすてて、みんながよいカブになれるように努力して下さっています。みんなで、リーダーやデンマザーに、ありがとうといいましょう。

やがて、月の輪になり、少年隊に上進し、シニアになり、ローバーになるでしょう。スカウトは、たのしいでしょ？みなさんが大きくなったら、杉原隊長にまけない立派なリーダーになろうではありませんか。そうしたら、日本は、もっともっと、よい国になるでしょう。

カブ隊　いやさか

（ライオン薗磨勤務
ボーイスカウト東京連盟副コミッショナー）

あと十年さきのこと

年長隊隊長　高橋　弘長

今日は靈南教会にカブスカウトができてからちょうど二十年目の日です。そして、お祝いの式が新しくできた靈南坂教会スカウト会館のホールでいまから開かれるところです。十年前のこの日にも十周年のお祝いの式が靈南坂教会の礼拝堂で行なわれました。その時カブスカウトだった人はみんな大きくなりました。月

の輪だった原君、川田君、沢君、河辺君、小池君、杉田君、高橋君はシニアスカウトの副長補になり、田中君、田浦君、三宅君、平井君はボーイスカウトの副長になっています。そして、石川君、小玉君、大木君、清滝君は、人数が多くなって第一隊と第二隊にわかれたカブスカウトの副長になって活躍しています。来賓の方がやって来ました。教会の先生、団委員の方、父兄の人たちそれに入口のところでにこにこしているのは十周年の時隊長だった杉原さんです。杉原さんはカブスカウトに入っているお子さんと一緒です。野儀さんの顔も見えます。また、十年前デンマザーだった里見さん、西木さん、萩原さん、持地さん、高島さんもカブスカウトになったお子さんをつれてやって来ています。二十周年の式の時間が近づいてきました。もう、ホールの中は集まった人達で満員です。真中のカブスカウトの席があいているだけです。霊南坂のスカウトが全部で二百人、お客様が二百人、あわせて四百人以上の人が集まります。さあ、いよいよ式が始まりました。八十人もいるカブスカウトが国旗と隊旗を先頭に入場してきました。すごい拍手です。みんなユニフォームにはキチンとアイロンをかけ、しわのよったネッカチーフをしているカブスカウトは一人もいません。カブ隊隊長の開会の挨拶が聞こえてきます。

カブのみなさん、これから十年たった二十周年のお祝いの時にはこのように霊

南坂のスカウトの仲間が今よりもっと多勢になり、立派なスカウトの活動ができるようにいっしょうけんめいやって下さい。

（元年少隊隊付
日本精工KK勤務）

カブの諸君へ

年少隊副長補
野　儀　英　宣

カブの諸君、十周年おめでとう。今から十年前、ちょうど君たちが生まれたころ、我々カブスカウト東京第四団が生まれたことになりますね。早いもので、僕もカブのお手伝いを始めてから四年もたちました。そのころの月の輪スカウトだった人が、今ではボーイスカウトで、班長や次長になって、立派に訓練に励んでいます。

ところで、カブの諸君、君たちはいったい、何のためにカブスカウトに入ったのか、カブスカウトやボーイスカウトは何のためにあるのか、考えたことがありますか？　カブスカウトがなぜあるのか、それには、いろいろ沢山の意味があると思うのです。でも、その中で、特に四団のカブの諸君に必要なのは、君たちが「元気で強い少年に、スクスク育つように」と、いうことだと僕には思われるのです。四団は、世界一大きい東京という大都会の真中にあります。そして、君た

ちはその大都会の中で生まれ育った少年です。東京は便利です。いろいろ遊ぶ所も、いっぱいあります。でも、君たちには太陽のキラキラかがやくような広い野原でのびのびと遊べるような所はありません。そして、君たちは、大勢の人の住むホコリッぽい汚れた空気の中で一年間の大部分を生活するわけです。こういう所で長い間生活していると、ちょうど、日陰に生えた植物のように、青白くてヒョロヒョロとした人間になってしまいます。ふだんの訓練や、キャンプ、ハイキングなどの戸外活動は、そんなところを少しでも補うためにあるのだと思うのです。

「健全なる精神は、健全なる肉体に宿る」という言葉があります。この言葉の意味は、「正しい心や考え方は、丈夫な体から生まれる」ということです。諸君が、この意味をよく考えて、立派な団のスカウトに成長することを、僕は心から希望します。

ほら、カブのモットーにもあるでしょう。「いつも元気!!」と。

（青年隊隊員　北里大学一年）

ボーイスカウトの底に流れるもの

年少隊副長補　古矢　紘一

スカウト精神は英国の騎士道精神からおもにくまれているのであり、それに我

我の日本の武士道精神からもいくらかくまれている。ということは我々日本のスカウトにとって誇りに思わねばならぬ。武士道精神は遠く鎌倉時代に、質朴な環境に訓育されたといわれている。武士が外来文化の接触もなく個有道徳が主体となって軍事を世襲して武道を磨き、戦場を往来する間に自ら会得した。個有道徳がその基礎となり、この武士の理想とする武士道は忠義、孝道、敬神、礼儀、廉潔、質素、廉恥、情に厚い、以上のような事が武士道精神に入っている。現在スカウトで活動している我々年令層にはこのような真のスカウト精神が身についていないのではないだろうか？（私もその一人だが）もっと我々は自分自身の行動に対して考えるべきだ。今日我々の年令層のいくらかの人間は社会的に問題にされている。というのは、この社会には悪い環境が多く、我々大人と子供との中間の人間には年令的にそういう悪い環境にひっかかりやすいし、とかく大人ぶったり、大人のまねをしたりする傾向が多い、そういうためにもスカウト活動が多いに必要であり、我々がもっと多くの人間をスカウトに入れてやらなければならないと思う。貧困な家庭の子供でも、ありとあらゆる層の子供たちでいっぱいになるようにしたいものだ。それには多額の援助が必要になってくるだろう。しかし、現在は出来ないかもしれないが将来にきっと実現させたいものだ。

（青年隊隊員　玉川学園大学二年）

会話

年少隊隊付
万石俊夫
戸田健郎

十周年の記念誌に何か書いてくれってたのまれたけど、何を書いていいんだかわからないから同じ隊付同志の三月×日の会話を書いてみよう。

「戸田、隊付やっていておもしろいかい。」

「子供たちと一緒にやってれば、いろいろ勉強になるね。」

「ひとくせもふたくせもある子供たちがいるね。そんな子供たちのめんどうみるのは大変だけど勉強にはなるよね。戸田だってチビのころはあれ以上だったじゃない。」

「まあ、そういうこと。」

「だけど、今の子供たちってギクッてするようなこと平気でいうのね。」

「そう、こっちがおどろくね。あんなこと家庭じゃいわないよ、きっと。」

「まあね。」

「話は違うけど、隊長やデンマザーのことどうだい？」

「隊長なんかすごくキザだけどさ、すごくあのキザが板についちゃっていて、それに顔がいいし。それでいてカブの知識は頭につまっちゃっていて、僕たちの

ことはいろいろめんどうみてくれるしすごくいい隊長だよ。」
「それにデンマザーは男の子と違うのかと思うくらい活潑で、僕たちなんか紅顔の美少年をいびっちゃってさ、こまっちゃう。その反面すごくピリッとしていてカブなんかいろいろめんどうみちゃってんじゃないか。」
「偉いよね。デンマザーなんかすごくきれいな人たちで本当によい人たちでした。」
「そういうこと。」

「ところで、戸田隊付さんよ、あなたはとってもカブが好きなようだけど。」
「そうね、私はカブが大好きでありますよ。」
「えばるなよ。」
「だけどカブの子供たちみんなかわいいし、勉強にはなるし、それにぼくがパパになった時役にたつでしょ。」
「なかなか未来のことまで考えてんね。」
「ところで、万石隊付はどう？」
「そうね、カブの子たちみんなチョットすきをみせれば、すぐさわぎだしたり大変ね。だけどさ、どの道どっかで同じ目にあうなら、いまのうちおおいにカブの子たちで練習しておいたらいいね。こんなことしたら隊長にしかられるかな、

だけど本当にカブでやったことは、世の中に出てから役にたつんじゃないかな。」

「だけどね、ぼくなんかの時代でやった人たちなんかぼく一人しかいないけど、道で会ったりすると、よお！なんていって話しこんじゃって、いまでも気のいい男たちばっかしだよ。だからいまでもつきあってるやつなんかいるよ。」

「万石さん顔にあわずいいことというね。」

「なにいってんだ。」

「ところで、万石さん、カブをやっていくのには父兄の人に大変なお世話をかけるね。」

「戸田、顔にあわずいいことというじゃない。」

「だけど真面目な話、うちの隊の父兄の方すごくいろいろなことでお世話して下さっちゃって、すごくぼくたちなんかやりいいじゃない。」

「そうね、土曜日なんか、だれかかならず父兄の方がいらしてるね。すごくはずかしいやら、きまりがわるいやらだけど、すごく勉強になるね。」

「いちがいに十周年といっても、大変な道があったし、父兄の方々や隊長や、デンマザーや先輩の人たちがいろいろお世話して下さったもんね。本当に有りがとうございました。」

「アレ、調子いいことといってんね。だけど本当にいろいろな面でお世話して下さった方々にはなんてお礼をいっていいかわからないぐらいだね。」

（万石・専修大学一年
戸田・立正高校三年）

イエス様のように

盛南坂教会牧師
飯　清

聖書には、イエス様の誕生の時の物語と、それから大人になってから十字架の上に死ぬまでの約三年間のことは記されていますが、その少年時代のことはほとんど書いてありません。ただ十二才の時に起こったことのほかには、少年時代のことは、「イエスはますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛された。」という短い一文いがいには伝えていません。

「人つくり」が叫ばれていますが、このイエス様の少年時代について記されている一文の中に、すべての理想も、私たちのスカウトの目標もみんな尽されているように思えます。

イエス様のように、みんなが知恵がますます加わって、賢明な子供になって欲しいです。

イエス様のように、みんなが背たけも伸び、健康な子供として成長することを、心から願っています。

イエス様のように、神様に愛せられる光の子供になってください。

イエス様のように、すべての人々に愛せられる子供として伸びてください。

この四つのこと、むつかしい言い方をすれば、知的、身体的、霊的、社会的の発達をすべてなしとげてください。

肉体ばかり大きなプロレスの選手や、頭がよくても戦争のことしか考えられない軍人、自分のことばかり思っている金持ち、神様を忘れて人間の力しか頼らない学者、みんな何か欠けています。

少年イエス様のように成長してください。

（育成会会長）

十のあしあと

しんまいスカウトをむかえる春、ちょっぴりつらいけど楽しいキャンプの夏、とくいのお料理とスポーツの秋、ストーブかこんでクリスマスの冬――をくりかえして十回目。教会にみんなが、たくさんのあしあとを残していきました。あのカブ、このカブ――今どこで、どんなことをかんがえているのでしょう。

カブにのぞむ

一期生　日下部　英一

青年隊隊員

カブ隊も発足して、早や十周年を迎え、僕も心からオメデトウをいいます。毎年秋にカブからボーイスカウトへ育っていき、カブにいる諸君は変わっても、いつも元気なスカウトが教会で楽しく集会しているのを見るのは、とてもいいものです。僕はカブの第一回目の卒業生として、ボーイスカウトに入ったのですが、杉原さん、志水さん（今北海道にいらっしゃいます）のリーダーと一緒に楽しくカブスカウト生活を送ったことをおぼえています。はじめて母につれられて教会

の門をくぐった時　その日は小雨が降っていましたが、迎えてくれた少年たちは、ちょうど君たちと同じように元気で、門に登って僕のことをジロジロ見ていたことを思い出します。そして今は大使館に変わってしまいましたが、人民広場と呼んでいた野原で、僕等は思い切り暗くなるまで遊んだものでした。しかし今はそのような広場もなくなってしまい、真黒になって遊ぶ機会は少なくなってきたようです。そしてカブの諸君も学校や家で机に向かって勉強をしなければならないし、またそうしなければ良い学校に入れないと今から考えている人もいると思います。けれども学校がそうなればなるほどカブの集会の大切さは増してきます。それは君たちが本当にカブとしての生活が好きで集会に出て学校で学ぶものとは違った色々なこと――工作をしたり、劇を考えたり――を自分たちでやることを覚えていくのです。たとえ長い時間をかけても、皆んなで作った手押し車に乗ったり、テントをはったりすることはすごく楽しいことだと思います。これらのことをカブの諸君にというより、本当はご父兄の方にのぞむといった方が良いかもしれません。

僕はカブの諸君がいつも元気に楽しく集会に出て、リーダーのいうことを素直に聞いて、立派なスカウトになって欲しいと思います。

（前年少隊副長補　中央大学三年）

金魚のフンのチビ隊

二期生　真木　壮一郎

教会の塔をグルグルグル、僕はもうくたびれちゃいました。さきに登っている父のおしりが左右にゆれています。暗い急な階段を登っていくのは、なんだかコワーイ試験を受けにいくみたいです。すると、「われはふくろう、楽しきふくろう……」と合唱が始まりました。その声が大きくなって、パッと広い明るい部屋に出ました。外国のスカウトのネッカチーフ、国旗などきれいなものばかりです。みんな歌うのをやめて僕を見ます。「ジロジロ」　でも一人もおっかない顔をしている人はいませんでした。でもみんな、「このチビなにしに来たのかな？」と思っているみたいです。大きな人ばっかりで、ヒゲの生えている人もいます。でもカッコイイお兄ちゃんたちです。ボーイスカウトってなんだかよくわかんないけど、動物園のお猿さんを見るよりは、うんとおもしろいとこだなと思いました。

……さてさて……これが当時九才にして四団のボーイスカウト（カブではない）に入隊しようとズウズウしくやって来た本人であります。僕はそのままなんとなく入隊しちゃって、デタラメにそこいらじゅうくっつきまわりました。金魚

のフンそのものです。また天性のズウズウしさが手伝ってクラスの誰たれボウヤどもを、動物園よりおもしろいところがあるといってはぞろぞろスカウトにひっぱってきました。そのころの僕の最大の望みは英語や数字やへんてこなものをペタペタくっつけたユニフォームを着てネッカチーフを首にまいた金魚のフンになりたかったのです。しかし、僕達はチビ隊、カッコイイユニフォームを着るのはまだまだです。

さてさて、いつのまにか金魚のチビ隊はぞくぞくと多くなってきました。かくして四団のボーイスカウトは金魚のフンの圧力に負けてカブスカウトの編成となったのであります。そしてカブ隊最初の集会、僕はデッカイ顔をして教会にゆきました。するとどうでしょう。金魚のフン達はダークブルーに黄色のネッカチーフ、丸いぼうし、肩に「4」の番号のユニフォームを着て十人くらい並んでいました。もう、みんな金魚のフンのチビ隊とも違うんです。でも僕のかっこうはまえと同じです。ジーンパンツにシャツ……これじゃあ金魚のフンのユニフォームです。とっても悲しかったです。僕はみんなに見られないようにいそいで家に帰り、泣きながらユニフォームを今すぐ買ってくれとわめきちらしました。ユニフォームをこの日までにそろえておくことをすっかりわすれていたんです。その日は父にユニフォームの持つ真の意味と本当のスカウトはそんなわからずやではないことを聞かされ、涙をふきふき集会に出ました。

そして、あれから十年。今のカブ達はどんなことをしているんだろう……。GSとCSの区別のつかなかった僕。一日一善と心にきめ、友達に二円借したり（まだ返してくれません。）、クリスマス、キャンプ……。

そして、もう一度歌いたいものです。「われはふくろ……わが古巣へ帰らなん……教会の森かげに」。

（日本大学二年）

想い出

三期生　井上　毅
ボーイスカウト東京第一五三団

「ところで、BSの方はその後どう？」僕は学校帰りの生徒で満員の山手線の電車のドアーに寄りかかりながら、話題のつきた彼に、わずかな沈黙の後で切り出した。

「最近すっかりごぶさたなんだ。君の方は？」

「うん、僕も。」

「あのころの連中、今どうしているかなあ。」

「今年大学を受験するという彼のニキビ面に、ちらっと、七、八年前のカブのころの面影がのぞいた。いつもキャンプファイヤーの時、その巧みな演技でみん

なを笑わせた上村や、色が黒くて馬の様に毛並のよかった組長の戸倉、副組長のモジャモジャ（望月）、稲葉、万石、竹村、寿山……みんなどうしているかなあ。

スカウト生活でいつまでも想い出に残るものは、やはりキャンプの想い出だろう。キャンプで初めて友を知り、スカウティングの楽しさを知る。そして、いろいろ傑作なエピソードも生まれる。僕の初めてのキャンプは、山中の舎営だった。カッコーの鳴く林の中に建っている山小屋は、カブの僕にはとても魅力的に見えた。大きい丸太の梁が見える屋根裏や、赤々と燃える暖炉、それに木の二段ベット。すべてが僕の夢をかなえてくれるのに充分な演出効果だった。

僕は友達と枕を並べて寝るのがとてもうれしかった。学校の旅行はいつも日帰りで、泊ったことはまだなかったし、窓を開ければ、草や木の匂と静かな暗闇が迫って来る山小屋で夜を過ごすのはもちろん初めてだった。おふくろの作ってくれた寝袋にもぐり込んで寝たのはいいけれど、朝になったら、寝袋からとび出して、おまけに頭と足が寝た時と逆になっていて、みんなに笑われたことは、いまだに覚えている。（しかし、よくベットから落ちなかったものだ。）その夜、デンマザーの大和のおばちゃまが、ベッドから落ちたとか、落ちなかったとか。あの頃、デンマザーは、大和さんひとり、僕のような寝ぞうの悪いカブ達を相手にさぞご苦労の多かったことと思う。しかし、もし僕がカブに入っていなかったら、こんなに楽しい想い出や、貴重な経験で僕の過去を飾ることはできなかったに違

いない。そして、彼との邂逅もなかっただろう。

ふと、こんなことをひとり考えながら、彼の顔を見た。電車が大きく横に揺れた。

「次は田町、お出口は左側に変わります。」

「じゃまた、元気でな。」

僕は電車を降りてホームの階段をのぼった。

（慶応大学一年）

やくそくとさだめ

四期生　大内　丘

年長隊隊員

僕がカブスカウトに入ってまず覚えたのは、「杉原さん」という名前でもった。その次には、「りーす、うさぎー、しーか、くーまー、つーきのーわ」という歌だった。そして三番目にカブの「やくそく」と「さだめ」を暗誦させられた。これは毎土曜の集会ごとに暗記させられたが、それは言葉として空転するだけでなかなか身にはつかなかったようである。

「さだめ」の一つは、「カブスカウトは、素直であります」というのがある。僕がカブに入ったころ、素直であったとはまず思えない。けれども杉原さんの

指導で遊ぶことはとてもおもしろかったから、自然杉原さんのいうことをよくきいて行動するようになったに違いない。しかし、素直であることの大切さを、ひしひしと実感するようになったのはずっと後になって、僕が副組長になった時であった。その時、僕の組にいうことをきかない子が一人いて、なだめ、すかすなどという高級な術を心得ていなかった僕は、さんざんその子にてこずらされたものである。

カブスカウトは、進んでよいことをします」という「さだめ」も実行することの難しいものであった。これは、僕もいっしょうけんめいそうしようと努力していたし、杉原さんもこれを目的にして僕たちを指導して下さっていた。しかし、難しいことであった。たとえば、紙くずを拾うというようなことにしても、大人の前で拾うことはなんとなく、わざとらしいような気がして素直にはできなかった。

こういうふうにして僕がカブの時は、あまり模範的なスカウトでなかったように思う。このごろになって隊付になったりすると、あのころ、どんなに杉原さんは大変だったろうと思う。

「孝行したい時に、親はなし」というが、さいわい、わが杉原隊長はお元気である。皆さん、おじいちゃんを大切にしましょう。

（麻布高校三年）

カブスカウトについて

五期生　加藤　正夫
青年隊隊員

僕がカブスカウトに入った動機は、もう数年も前のことなので、はっきりとは覚えていませんが入隊した時は、たしか小学校三年の時でした。母と兄にむりやりにすすめられ、それに家から近くにあったということと、僕にはもう一つあの紺の制服を一度でいいから着たいという一つの魅力もあり、それでカブスカウトに入隊しました。入隊当時は、すぐには制服は着せてくれず、僕の制服を着るという関心はだんだんうすれてしまいました。しかし、それも数ケ月で念願がかないました。入隊して二年目に僕は、一組の組長になりました。初めて自分一人で組をまかされました。最初は何をやっていいのかわかりませんでした。キャンプ等があると僕は本当のことをいうと心配でたまりませんでした。みんな僕についてきてくれるか、また自分はみんなをひっぱってこれるか、集会にはみんなが静かに聞いている、ふざけてはいないか、集合の時はみんなそろって来ているか、そんなことをくり返しくり返しカブスカウトの生活を続けてきました。ただ、組長という言葉の中にこれだけの重要さがあることを今さら、おどろかされます。しかし、それによって僕は自分に自信というものがついた。失敗したことも何回

となくありました。そういうことをのりこえて自分でもちゃんと一つの組を運営し得る力があるのだと自分にいいきかせました。そして組長というものは、ただその組の中で一番えらいということだけではありません。むしろ組長というものは組のみんなの下にいて、ちょうど犠牲をなして生活をしている動物のようなものである。道にまよったり、外からの危険はないか等と、いろいろな心配もあります。僕は今考えてみるとカブスカウトがこれだけ人間を作るうえに強い力をもっていたということに驚きました。ただ制服を着て、カブスカウトという形式にはまったものとしか考えていませんでした。ふだんの集会や、キャンプなどが人間の友情や協力性を強くしていくために大事かもしれないと、今さらながら知らされました。最近の学校は人間性について重点をおいている。カブスカウトはそのための準備場所のようなものです。私は本当にカブスカウトに入って自分を考えていくために大変役立ちました。そして母にむりやりに入れられたことが僕にはよかったのだと思います。

（明治学院高等部二年）

キャンプの想い出

六期生　柳下泰児

あれは今からもう五、六年前の箱根中強維のキャンプだった。よく記憶してい

ないが私が四年生か五年生の時だった。現在、中学校の友達がその時の友達とは、偶然である。あの時は保坂君のお母さんが同行したのを記憶している。忘れもしない八月の暑い一日を。隊付の野俵さんや日下部さんたちが私たちを引率して下さった。二日目か三日目の朝おきてすぐでした。マラソンをやらされてすごくいやになったこともあった。その日、私たちの組があまりにも騒がしく、隊長じきじきにおこられたことも、また、保坂君の靴がどこへいってしまったのか思い出せば、ひとつひとつがとてもたのしかったことばかりです。最後の晩のキャンプファイヤーは、私の姉が近くに来ていたので見に来てくれました。あの時は、たしか我々の組は「オオカミと七匹の子羊」をやったことを保坂君とときどき思い出しては笑いの種です。私はおぼえています。隊長さんや隊付さんの劇もうすらうすら記憶しています。もう中学三年も終わろうとしていますが、あの時のいろいろな体験は大人になっても忘れないでしょう。

（早稲田大学高等学院一年）

カブの思い出

七期生　平井　真明

少年隊上級班長

僕がカブに入隊したのが昭和三十三年、もう足かけ六年になります。その中で

一番思い出に残るのは、やはり入隊してはじめての日光へ行ったキャンプです。その時僕は五組で、組長が高橋さん、副組長が内藤さんだったと思います。そしてデンチーフが今ローバースカウトの加藤さんで、デンマザーが新崎さん（現西木）でした。あの時はものすごくはりきって出発したのですが、あまり面白いキャンプとはいえなかったと記憶しています。デンマザーたちが入りたてで不慣れだったのもありますが、ご飯もおかずもあまりおいしくなく、これまでのキャンプで一番面白くなかったと思います。その点、今のカブは、ユースホステルなどの設備の整った場所でキャンプできるのは大変幸せだと思います。その上、デンマザーも、リーダーもりっぱな人に恵まれ、こんなよい隊は日本にないと思います。

それから、富士見高原、箱根へとキャンプに行きましたが、あまりそのことについて記憶していません。しかし、箱根の時、優秀組を取ったことは今でも忘れられません。それから月の輪からBSへ上がり、もう、三年たってしまいました。今、カブの時のことを振りかえってみると、僕は自分の力を全部出しきってカブでの三年間を過ごせたと思い、また、僕はこれを誇りにできると思います。

カブの人は、自分の力をフルにはっきしてカブの時代を過ごして下さい。東京第四団カブ隊がこれからも、ますます発展していくことを祈ります。そして、みんながこの四隊を世界一よいカブ隊にしてくれることを期待しています。

（麻布中学三年）

秩父の思い出

八期生　青　島　務

カブ隊でぼくが一番印象にのこっているのはキャンプだ。特に、秩父に行ったことをよくおぼえている。そして楽しかったのは月の輪として行き、隊と別行動をとったこと。ぼくはなんだか目分が偉くなったような気がした。また、追跡サインで山へのぼったことも。ぼくは山らしい山は一度ものぼったことがなかった。まして、ぼくの好きな追跡サインでのぼったのだからまったく楽しかった。それにナイフ、ロープ、懐中電燈などの装備を持っていったこともまた楽しかった。夜中に非常こしゅうして、ダムのそばの空家へ二、三人で行かされた時はちょっとしたスリルがあった。おまけに山犬はうろついているというし、いま考えてもこわくなる。でも、いわれたとおり空家へ入ったあとはなんだかスーッとしたようだった。また、ぼくは二度も同じ賞をもらった。それは、一回は月の輪だけの物を見つけるゲームでせみをつかまえたくさん点を取り最高点となった。また、隊全体でこれと同じゲームをやった時もやはり最高点を取り、賞をもらったというわけだ。また、驚いたことは夜、光にかぶと虫がたくさん集まってきたことだ。都会では見られない光景だった。虫の話がでたついでに、ここでぼくが一番捕か

ったことはなんだと思う？　それは、いじっていたくわがた虫のメスに指をかまれたことだ。その痛いのなんの、ひっぱってもとれない。いそいで水につけた、するとどうやら手からはなれ、やっと、痛みがとまった。

カブ隊の生活は楽しいことばかりだった。

（港区立三河台中学校二年）

たゞカブスカウトになったか

九期生　川　栄

少年隊隊員

ぼくは昭和三十五年九月にカブスカウトに入隊した。その時小学校二年生だったので、ものごとの区別があまりつかなかった。カブスカウトに入った理由としては大きな理由はない。ただ、ぼくのお兄さんが入っていたのでぼくも入ったまでだ。カブスカウトに入った時は、なれていなかったのでおもしろくなかった。しかし、なれてくるにつれて、だんだんおもしろくなってきた。カブスカウト初のキャンプはおもしろかった。自分だけでは何もできなかったが、まだ、ぼくの頭の中に残っている。それから、あと頭の中に残っているものといえば、紙の箱作り、キャンプ、ボーイスカウト入隊の時ぐらいである。そう、ボーイスカウト入隊の時、入隊する人たちが飯田隊長の前にきんちょうしてたっていた。つぎつ

ぎに名前をよばれ新しい班に入っていった。そして今日ボーイスカウトの二級スカウトとして新しい道を進んでいく。

カブのある隊集会

十期生　今井　哲哉
少年隊隊員

ぼくの三年半のカブスカウト生活の間には、ずいぶんたくさんの集会を持ったことになる。これは、ふだんの集会と同じに考えられないかもしれないが、神宮外苑から渋谷まで歩いた、ボーイスカウト新春大行進に参加した時のことである。この日はすばらしく晴れ上がった一月の第一日曜日であった。カブスカウトを代表して四団から、かわ君がせんせいした。背の高いかわ君がせんせいしても、見えないほど多勢のスカウトが集まっていた。バトンガールを先頭に外苑を出発した。ぼく達は、カブスカウト全体の先頭を歩いていた。杉原隊長は、国旗集団の先頭にいて、ぼく達とは、いっしょでなかった。あとできくと、バトンガールの一人は、新崎（現西木）デンマザーの妹さんということだった。出発の時、後の誰かが足をふんだということで、けんかをしてしまった。いやな気持だったが、その時から解散の時までに十数回も足をふまれてそのたびに、ぼくのくつはぬげ

ぎに名前をよばれ新しい班に入っていった。そして今日ボーイスカウトの二級スカウトとして新しい道を進んでいく。

カブのある隊集会

十期生　今井　哲哉
少年隊隊員

ぼくの三年半のカブスカウト生活の間には、ずいぶんたくさんの集会を持ったことになる。これは、ふだんの集会と同じに考えられないかもしれないが、神宮外苑から渋谷まで歩いた、ボーイスカウト新春大行進に参加した時のことである。この日はすばらしく晴れ上がった一月の第一日曜日であった。カブスカウトを代表して四団から、かわ君がせんせいしたが、背の高いかわ君がせんせいしても、見えないほど多勢のスカウトが集まっていた。バトンガールを先頭に外苑を出発した。ぼく達は、カブスカウト全体の先頭を歩いていた。杉原隊長は、国旗集団の先頭にいて、ぼく達とは、いっしょでなかった。あとできくと、バトンガールの一人は、新崎（現西木）デンマザーの妹さんということだった。出発の時、後の誰かが足をふんだということで、けんかをしてしまった。いやな気持だったが、その時から解散の時までに十数回も足をふまれてそのたびに、ぼくのくつはぬげ

カブのおともだちブラウニーから

中村桃子

ブラウニーとカブスカウトは今年同じ十年目だそうです。私は、カブといちばんさいごにあったことを書きます。いちばんさいごにあったのは、私と、いがらしさんとやっちゃんが、ガールスカウトにはいっているおねえさんたちをまっていると、カブのでぶとやせとちびが、ボーイスカウトのおにいさんたちとおすもうをとっていたので、私たちは、すみれのへやでオルガンをひいていました。いがらしさんがひいているとき、カブのでぶと、やせとちびの三人が、「へたくそオルガン」といったので、やっちゃんと私はおこって、おいかけていきました。一つめの、さかの下へきたとき、やせが、「やるき？」といったので、「やるわよ。」といってやりました。でも、私は、「こっちは二人で、むこうが三人じゃ、ふこうへいだから、こっちにも一人つれてくるわ」といって、いがらしさんとやっちゃんが、しょうこちゃんをよんできました。私は、「じゃんけんで、やるあいてをきめようよ」といったので、じゃんけんできめました。私は、チョキでやせとやりました。いがらしさんは、パアでちびとやりました。やっちやんは、グウで、でぶとやりました。はじめに、やっちゃんは、からだが小さいので、でぶ

に負けました。つぎに、私がやせをなかしました。つぎに、しょうこちゃんが、ちびとなかなかしあいがつかないうちに、くらくなってしまったのでかえりました。私は、やせっぽちはないたけど、やっちゃんは、なかないから、女の方がかちだとおもいました。

まつざきやすこ

あたらしい人が、ブラウニーへはいってきました。ひとりは、「もりとじゅんちゃん」で、その人のおにいさんは、カブスカウトにはいっているのです。ブラウニーでは、「おきて」というのがありません。でも、カブスカウトでは、あるそうですね。カブスカウトでは、いろいろなくんれんをしたりしていますね。もりとじゅんちゃんのおにいさんは、三年生だそうですね。

大きなあしあと

この十年のあゆみを、ぶぢにつづけられたかけには、こんな尊い力がありました。まえにこのカブ隊のためにご奉仕くださったかたがたから、おことばをいただきました。

十周年をお祝いして

ボーイスカウト東京第一五六団年少隊隊長
大和　節

昭和三十年三月というと、もうそろそろ十年一昔になりますが、長男が四団にお世話になることになり、カブの組織上お母さんが必要ということで、お手伝いし始めたのが、四団のカブの初代デンマザーだということ、感慨無量です。日本のカブの歩みとともに、この十年歩んできた道は、いろいろの困難もあったことと思います。しかし、その頃はまだ大学生だった若い、年に似あわずよくできた杉原隊長という立派な隊長とともに、いくたの試練をのりこえて、今日まで年月を重ねてきた四団のカブ。その成長ぶりを、ふもとの方で常に見守りつづけた私

は、十周年という記念すべき時を迎えられたことを心の底より喜んでおります。

道で、「おばさん！」と声をかけられると、誰だったかしらと見違えるほどに成長した、いたずらっ子ですばしこい「うさぎ」だった子！　思わず足の下から頭の先まで見上げてしまい、「あの時のカブちゃんか。」　あの子が立派に、年長として、青年として今でもスカウティングを続けているのかと思うと、びっくりして目をみはるやら、涙のこみ上げてくるほどうれしくなるやらで……。

十年と、一口でいえば簡単ですが、その間の常に変わらぬ杉原隊長の訓育ぶりただ敬服するのみです。霊南坂教会のスカウトの歴史に、また、大きな一段階を基かれた第四団カブ隊の前途を祝して、ゆるがざる一つのバックボーンとなっている神に感謝を捧げたい気持で一杯でございます。

四団のカブの皆さん!!　おめでとうございます。

常に十字架を仰いで進んでください。

（元第四団デンマザー）

金字塔の樹立

道下　恒夫

東京第四カブ隊誕生十周年おめでとうございます。私も名古屋へ転勤以来スカウティングとは縁がなくなりましたが、しかし、一生スカウトの気持で毎日を過

ごしています。今般の栄えある記念誌に投稿できることを喜びつつ以下雑感として記します。

私がスカウトになったのが小学校六年の終わりでした。以後約八年間お世話になりましたが、今、社会に立ち思うと、なつかしい思い出が脳裏をかけめぐります。現在の私にスカウトの経験がどれほど役立っているかわかりません。そのご恩返しというわけでもありませんが、自分の経験してきたことを後進につぐため、カブ隊の指導者をやらせていただきました。カブ隊十周年の金字塔樹立に少しでも力を注がしていただいたことに誇を抱いています。

いろいろと思い出します。カブとのキャンプ、ハイキングでにげてもにげても追ってくる子供たち、時には手荒くあつかってもまだ追ってきます。それらの時私は子供たちが実にかわいいと思い、カブにますます愛着を覚えました。たぶん諸先輩も同じことと思います。カブスカウトの素直さ、やくそく、さだめをいう時のあの澄んだ眼、けっして忘れません。しかして、これらカブを一年ごとにボーイスカウトへ送りこみ、また、新入スカウトを迎え指導し、それをくり返す。やがて十年を経た。

一口に十年といっても、その内容は指導者にとって数々の苦労、思い出、経験、感激などが山積され、かたまって立派な金字塔を樹立したといっていいでしょう。あらためて、諸先輩指導者、現指導者に敬意を表わすとともにご苦労さんと声を

授げかけたい気持でいっぱいです。これからは、日本の、ひいては世界のカブスカウトの先輩となって、ますますみがきをかけていただきたいと思います。ついさきごろ、名古屋まつりのさい、当地カブ隊がボーイスカウトの交通整理を手伝っていました。とてもきびきび動いていて、見ていて気持のいいものでした。

四団カブスカウト諸君、隊長さんや各指導者に迷惑をかけないように、やくそく、さだめをよく守って立派なスカウトになって下さい。

終わりに東京第四団カブ隊の発展を祈ります。

（元第四団年少隊副長補
前一五六団年少隊隊長）

カブの思い出

佐久間　真幸
（現八木千恵子）

大学も二年になったころでしたが、富江ちゃん（今田隊長夫人）からお電話がかかってきました。

「カブのデンマザーってしてみたくなあーい？」「カブ！？」

私には弟もありませんでしたし、そんな年頃の男の子って気をつけて見たこともありませんでした。それに一瞬、自分はGSとして進むのにBSに入ってしまうのは、という考えも頭をよこぎりました。でも、「何でもやってみよう」です。

最初の説明会の時に、井出さん（現願川）、新崎さん（現西木）、里見さん、萩原さん、渡辺さん（現高島）と私の年令は違っても三つという同じ年頃の女の子が集まりました。それと先輩の大和さんのおばさんと、六つの組が出来あがりました。

自分のつく組がきまって、一つの小部屋で初めて紹介しあったその時、私は小さな男の子を前にしてずい分真剣な気持になっていました。それから一緒に歌ったり（でも、カブはあまり歌が得意じゃなかったわね）、ボールで遊んだり、すっかり楽しくなってしまいました。ですから、ミーティングが長いと感じたことはありませんでした。カブは、ちょっと見ていると、ワンパクぞろいのようですが、女の子よりデリケートな面もあるし、はずかしがりやでなかなか気持のやさしい子もおりました。

カブの指導者講習会の時に小坂先生が、諸リーダーはスカウトに奉仕しているというよりも、むしろ、スカウトとともにあることによって、自分自身の成長にプラスになるのだと、おっしゃったのを本当にその通りだと思ったことでした。いろいろの事情で一年間で、せっかくおなじみになった皆様と別れを告げることは残念でしたが、持地さんという、デンマザーには最適の方をお願い出来たのは、うれしかったことでした。何かの折に、霊南坂に顔を出すと、もう、BSやSSになって、ニョッキリ伸びた昔のカブちゃんに出会うと、何となくおかしいやら、

うれしいやら、思わず顔がほころんでしまいます。

恵まれた環境にあったといえばそれまでででしょうが、十年という長い年月たってみれば短いようでも、決っして平担な道ではなかったと思います。心からおめでとうと申しあげると共に、ご苦労様でしたと申しあげたい気持でいっぱいです。

（前第四団デンマザー）

初代年少隊隊長　志水　功

しょくんのカブ隊が今年で十才になるんだってね。おめでとう。

ところで、北海道に住んでいるしょくんの兄弟――りすやうさぎや、しかやくまも、きっとしょくんに「おめでとう」といっているよ。北海道のりすは、きいろとくろのしまもようのセーターをきて、くるみや山ぶどうをたべ、ときには、浜べに出てきてさかなをひろったりします。

うさぎは、雪の上に足あとをいっぱいつけて走りまわっています。今はまっ白な毛ですが、夏になると茶いろになって、林の中から急に道にとび出して、私の車とならんで走ったりします。

しかは、さむさにはぜったいつよいくせに大雪はにが手です。なぜって、雪がふかいと、あのスマートな足が雪にぬかってうごけなくなるからです。むかしから北海道に住んでいたアイヌの人たちは、しかの足の毛皮で冬のくつをつくってはいていたそうです。

北海道のくまは、毛がすこし茶いろっぽい「ひぐま」です。今は冬ごもりのさい中ですが、このあいだに子ぐまがうまれます。うまれた時はねこぐらいの大きさですが、どんどん大きくなると、のどに月のわができます。

とても足が早くて、夜なかに海岸の林にいたと思うと、つぎの朝には、もう三十キロもおくの山にあらわれます。

ところでカブのしょくん。これらの動物たちのせいかつは、けっして平和ではありません。たのしいすみかはせまくなり、たべものはすくなくなって、おまけに、てっぽうでうたれたり、わなでつかまえられたりです。

けれども、カブのしょくんがおとなになって、よの中が思いやりの心でいっぱいになる時、りすも、うさぎも、しかも、くまもみんなが平和にくらせるすばらしい自然動物園が、きっとできることでしょう。

みんなの声が

ほら！　きこえるでしょう
カブの森から

一　く　み

テンマザー　高　島　拡　子

去年の夏のキャンプのことでした。無事すべてのプログラムをおえ、お世話になったお部屋の掃除をすませ、子供たちは自分自分の荷物をリュックに整理してひとまとめにしてありました。私がちょっと部屋をあけてもどって来ましたところ、全員がそれこそまじめな顔をして、一列にならんで何やら話し合っておりました。私もすみで書類の整理などしながら聞いておりますと、ライオン裁判が開かれていたのです。（一組はこの年、キャンプではライオン組でしたので、そのライオン組の反省会のようなものでした。）ベットの上にチョコンと一人のせられているのは今年初めてキャンプに参加したうさぎのＩ君でした。まるい目をパ

チパチさせてしっかりした口調で答えていました。去年は部屋が小さくてベットも一つに二人で使用した人もあり、I君も組長のH君と一緒でした。キャンプ生活ではお兄さんのH君が何かと小さなI君のお世話をしてあげたことが、ほかのカブの子供達にいわせるとI君が小さいからといってあまり手伝ってもらいすぎた、もう少し自分のことは自分ですべきだといって、せめておりました。細かいことについて皆からワイワイ注意され、質問されて（かなり強い口調でした）いるI君が少しかわいそうに思えてまいりましたが、I君はしっかりしていて、涙ひとつこぼさずに答えており、悪かったところは、もうしないといって、これからは、がんばることを全員の前でちかいました。そのあと、私が、「ぼくたち一人一人はどうだったのかしら、I君にちゅうもんしたことをぼくたちはちゃんとやっていたの？」と聞いてみましたら、ある子はやったといい、ほかの子はだまってニヤニヤしていました。他人をせめる前に自分自身はどうだったか反省して、皆がよい子になってほしいと思いました。さいごにみんな仲よく今年もがんばろうと、仲よしの輪をして裁判、いや、キャンプを無事に楽しくおえることができました。

くま原　陽一

ぼくがカブに入ったのは二年の時だった。その時は三組に入ったがその後一組に入った。みんなわからないことばかりで、しまいにつまらなくなってやめようと思った時もあった。でも、キャンプへ行ってそんなかんがえは消えてしまい、「カブになってよかった」と思った。三年になると新しいカブがたくさん入ってきた。中には、ぼくより大きい子もいたが、たいていは二年、三年のカブだった。新しいカブが入ってきたのでうれしいとも思ったが、また、「しっかりやらなくちゃいけない」と思った。そして今、組長になるまでにぼくはほんとうに「カブになってよかった」と思った。スカウトでなければならえないなわむすびやその他いろいろなことを知った。そして、「カブスカウトはいいところだ」と思った。これからもカブスカウトとしてりっぱにやりたいと思います。

くま川田夏夫

ぼくはカブになってよかったと思う。一つには、体がじょうぶになった。二つには、たくさんの人たちと友だちになった。三つ目には、ボーイスカウトにはいるのにつごうがよい。四つ目には、キャンプにいっているのでこんど学校で林間学校に行くが、きっと、だんたい生活が守れるだろう。五つ目には、カブスカウ

トになってから教会学校に行くようになったので神さまのことや、いろいろなもようしなどをしるようになった。六つ目には、カブスカウトのおもしろいうたをたくさん学んだからだ。このほかにまだかぞえてみれば、かずかぎりなくある。また、ぼくたちのたいのことをぼくはとてもほこりに思っている。なぜかというと、広いにわ、雨の日には、きょうかいに人って集会をすることができる。こんなよいところはめったにないのだから、もっとこのたいにたくさんの人がはいってほしい。

くま沢　春生

ぼくがいちばんたのしかったことは、キャンプの時です。げきやうたをうたった時がキャンプの中でも、いちばんおもしろかった。それから、食事をつくった時もおもしろかった。一回目はチキンライスをつくった。二回目はサンドウイッチをつくった。けれど、こまったのは、バターがかたかったことと、マヨネーズがたりなかったことだ。それでも、うまくつくれた。とてもおいしかった。

しか　及川　修一

はたあげがすむと、「はたあげのうた」をうたい、おわると、ゲームやせいれつれんしゅうをします。すぐ組しゅう会をやるときもあります。組しゅう会では、ジャングルブックをよんだり、カバーをつくることもあります。ぼくたち一組は、係をきめてやっています。荷物係、カブブックの係、ハンカチ・ちりがみ・つめの係、そうじ係と、それぞれ、表をつくってやっています。組しゅう会がおわると、そうじ係の人だけのこって、あとの人は外へでてあそんでいます。ふえがなると、ばていけいになって、こっきをおろします。リーダーが「わかれ」というと、デンデンデンと、「いつもげんき」をしてかえります。

しか　朱鴻　棵

ぼくは、はじめカブスカウトにはいるまえ、みんなにへんなことをいわれました。でも、はいってみたらカブスカウトはいいものだとわかりました。ぼくは、はじめ、からだが大きかったからまちがえられて月のわにいれられてしまいました。あとから一組にはいりました。カブスカウトにはいってから、いろいろなことをおぼえました。とくに、うたなど、弟やいもうとにおしえてあげます。ひまなときは、カブスカウトでならったゲームをおしえてあげます。ぼくはカブスカ

ウトに入ってよかったとおもいます。

しか　小　達　和　男

ぼくがカブスカウトに入ってから、やく十ケ月。ぼくはカブスカウトで、「きりつただしい人になりなさい。」といわれてから、きりつがただしくなりました。こんなりっぱなことが出来てほんとうにカブスカウトに入ってよかった。

うさぎ　五十嵐　哲

ぼくは、きょ年ボーイスカウト第四だんにはいりました。そのころは青山にすんでいましたが、三月に、今いる杉並へひっこしてきました。はじめのころは、わからないのでいつもママがついてきましたけれど、一ケ月ぐらいしてからは一人でいけるようになりました。青山のときとちがって、ずいぶんとおいいので冬なんか、まっくらになってしまいます。ぼくはいつもでていくとき、カブにいくのはいいんだけど、ちかてつにのって一時間もかかるのかと思うといやになります。でも、いろいろのことを、おしえてもらったり、うたをうたったり、ゲームをしたりするしゅうかいがたのしみなので、ぼくはやすまないでいっしょうけん

めいいきます。このあいだ、あたらしくカブにはいる人たちがきていました。ぼくたちはすこしおにいさんになるので一生けんめいがんばります。

りす　杉田　英彰

三十一ページをごらんください。

デンチーフ　高田　繁

ぼくが杉原隊長に、「デンチーフになってくれないか。」と、頼まれた時、デンチーフの仕事がつとまるかと心配した。まだ小さいカブたちを指導できるかといろいろ不安だった。キャンプへ行った時には、つらいことや、楽しいことがあったが、そのつらい道を歩んだのが、自分のためであると思うと、数しれない喜びがあった。ぼく達がまだ、カブにいたころの先輩のデンチーフのつらさが、ひしひしと感じられた。

これからも頑張って東京第四団を発展させるよう努力します。

（少年隊隊員　千代田区立麹町中学二年）

二　くみ

デンマザー　森原昌子

ずっと前にカブ隊にさよならをした人たちは、「今、二組にはどんなやつがいるのかな」ってときどき思うでしょ？　それにみんなが「やっぱりカブに入ってことはよかった」と思い出しているといいなと思います。みんなが出ていったあともカブ隊にのこっているデンマザーたちも、みんなが大切なものを忘れずにもっていってくれるように、そしてそのものがいつもたえないように、ゆたかにわき出る「スカウトの心」を守りつづけて、新しく始まる階段をのぼってゆきたいと思っています。さて今年はカブ隊の十周年とオリンピックの年。いつもとっぴなことを考え出して私を笑いころしそうになる二組のみんなが何かくびから、そろメダルのかわりに、ふだみたいなものをぶら下げています。せんとう、あにはいちばぁーん赤いホッペの「カンツメ」、組長の河辺君、「てきをもたず、子供の仙人みたいに何でもできちゃうでしょう」というふだを下げています。いちばぁーんクリクリ目玉の「オーサム、コサム」の須田君、「・・・オリンピック出場選手、スポーツとかえ歌のことならまかしとけでしょう」、その次にひかえてるのは、けんかすればするほど仲よくなるだからと、オーサムとけんかのたえない、いちばぁーんのがんばりや、「イトチャン」伊藤君、「あのさぁ－あで

始まる発表、カブに入っていろんな進歩があってうれしいでしょう」、いちばぁーん声が大きくて「ハッスルボーヤ」小池君、「ひたいにしわをよせると何ていい考えが出るんでしょう、歌がうまくてウィーン少年合唱団からよびにきたでしょう」、さて、いちばぁーんのんびりやの「えんどまめ」遠藤君、「どんな小さいものでも手にとって観察するでしょう。発明もとくいでしょう」、もっそりあらわれたのはいちばぁーん声のひくい「ボロヤ」の副組長細谷君、「よくがんばってくれたでしょう。動物の絵がうまくてみんなうらやましいでしょう」、さいごにひょこひょこやってきたのは、いちばぁーんオチビサン「マスコットてっちゃん」高橋君、「みんなにまけずえらかったでしょう。もう本の表紙も一人で作れるでしょう」。それに去年四月、「もも太郎」のおどりを教えてくれた窓田君はあれからすぐドンブラコドンブラコと海を渡ってアメリカにいって活やくしています。

みんな、みんな「いつも元気」で今もらった賞を大切に大きくなって下さい。デンマザーもたのしみにしてます。

くま　河　辺　史　郎

ずっと前から、ぼくの家のすぐそばの関所跡のところに、たった一人で屋台車の中に、おじいさんが暮らしていて、ぼくはかわいそうでたまりませんでした。だんだん寒くなると、こごえ死ぬかも知れないので、おにいちゃんと二人で心配しました。それからおにいちゃんと相談して、老人ホームへ入れてもらえるように警察の署長さんに二人で手紙をかいてみました。クリスマスの日、隊長が、「私たちは、こんなに楽しいおいわいができるが、世の中には不幸な人がたくさんいることをわすれてはいけません。」といったのに、ぼくは、なんだかはずかしくて何か持っていって上げたくてもなかなかいかれませんでした。おにいちゃんと二人でママに相談したら、「それじゃ、おせち料理と、おもちを大みそかに持ってってあげなさい。」といいました。ぼくは、「なんだか、いやだなあ。」と思ったけれど、「カブスカウトに入っているんだから、進んでよいことをしなくてはだめだよ。」とおにいちゃんがいったので、勇気をだしておにいちゃんと持っていきました。おじいさんは、とってもよろこんで三度も、「ありがとう」といいました。帰りにぼくたちは、「いいことをしたな。」とよろこびました。夜、ねながら、おにいちゃんと二人で、「おじいさんは、よいお正月を、むかえられるな。」と話しました。

一月の終わりごろ、ぼくの家におまわりさんが来て、おにいちゃんとぼくがよ

ばれて、「きみたちは小さいのに、おじいさんに親切にして感心だね。」とほめてくれて、「都の方に話を進めているから、しせつに入れて上げる。」といいました。ぼくは、「手紙を書いてよかったなあ。」と思いました。カブスカウトに入っているので、進んでよいことができたんだと、思いました。これから、月の輪に入るので、もっと、もっと、進んでよいことをしようと思います。

くま　細谷　悦啓

きょ年のキャンプは楽しかった。山にのぼっていったとき、どうくつにはいった。そのとき、あまりさむいのでおどろいてしまった。そこを出てからしばらくいくと、一本の大きな木からいろいろなしゅるいの木が出ていた。ぼくはふしぎにおもった。それから、キャンプファイヤーのときにやったげきは、みずうみのそばのいわの上でみんなでかんがえたので、とても楽しかった。

くま　遠藤　斗紀雄

カブスカウトは、きびしいがおもしろい。ぼくは、カブスカウトにはいって、いいとおもった。どうしてというと、学校で、たいいくやなんかがよくなって、

じしんがついてきた。ぼくは、はいったときどんなのかとおもった。その後、だいたい五十六回ぐらいカブスカウトにいったとおもう。ぼくは左の耳がわるいので三回ぐらいやすんだ。ぼくは、おかあさんにすすめられてはいった。おかあさんは、エチケットにはんしないことを、おもわせるのだといった。まだ、キャンプには一回しかいっていない。もうじき、月のわだ。そしてボーイスカウトになる。これからも、いろいろなことに、じゅうてんをおいていこうとおもう。キャンプにいったのは西湖だ。西湖は、ふじ五湖の一つです。ずいぶんあるいたりしました。くるしいときも、おもしろいこともあった。ぼくは、こわい道やなんかのところは、カブスカウトの歌をうたいながらあるいたりしているときもあります。学校でもカブスカウトを思いだします。こんど、ぼくが大きくなってボーイスカウトになったら、おせわになったかわりにぼくは、おせわしてあげようと思います。

ぼくのもく標は、「げんきよく、つよく。」そして、カブスカウトでいうことをきいて、すなおにしたいと思います。それをカブスカウトのもく標にしたいと思います。もうすぐ、月のわスカウトになる。元気よくがんばっていきたいと思います。りっぱにせいちょうしていくことを、のぞんでいます。だけれども、もし、もく標をやぶったら、もう一度もく標をたてようと思います。十二月の終わりからためた、ちょ金は三百五十円になりました。

くま　小池四郎

はじめ入った時は、はずかしかった。一回目のキャンプは、しんぱいでしたが、一年たつと、だんだんカブがおもしろくなってきました。でも、ときどきさむい日があると、「いやだなあー。」と思います。でもがまんして、やすまないつもりです。一回目のかいきんしょうは、とてもとてもうれしかった。さんねんだったこともあります。二回目のキャンプでした。かぜをひいておよがなかったのが、ざんねんでした。

カブにいると、一週間がみじかくかんじられます。この前、にちようがきたと思ったら、もう土よう日がきています。カブで、いちばんおもしろいのは、ピクニックやキャンプです。やがいで、あそんだり、しょくじをするのがすきです。これからも、がんばっていっしょうけんめいやります。

しか　伊藤勝己

一、カブに入隊してからのぼくは、カブの「さだめ」をまもって、りっぱになったと思います。

二、自分の身のまわりをきちんと、机の中のせいりや、自分の物のあとしまつ、せいとんが、じょうずにできるようになってほめられます。

三、歌がじょうずになったこと。音楽の時間、いつもカブで歌っているので、おもいきり大きく口をあけて楽しく歌うので、いい声がでて、音楽の時間も楽しい。
四、図工がうまくなったこと。くふうして作ることがうまくなった。
五、発表の力がついたこと。まえには教室で手を上げる時、わかっていても、もし、まちがって笑われたらはずかしいと思う心が強くて、じしんがもてなかったのに、なんでも思ったことをはっきりと発表することができます。

しか須田　治

カブにはいってよかったこと

一、いろんなむすびかたをおぼえた。
二、ひょうしの作りかたをおぼえた。
三、いろんなうたをおぼえた。
四、いろんなせいれつをおぼえた。
五、いろんなことができるようになった。

わるかったこと

一、時間がつぶされる。
二、たべる時間が少ない。

三、くらくなる。

みんなで、ごうどうでできるようになり、かぜもあんまりひかないし、一人でなんでも、できるようになった。キャンプの時は、よくねられすぎます。だから、六時前にはいつもおきます。

うさぎ

高橋　敏次

お正月、日比谷こうえんから、ゆうらくちょうと、西ぎんざをとおって、東京とちょうまで行きました。ぼくは、東京とちょうへ行ったのは、はじめてでした。町の中を、大ぜいの友だちと歩いたのは、はじめてでしたので少しもさむくありませんでした。

またある時は、みんなでいっしょに、たのしくいろいろなおいしいおかしを、作ったり、また、バスでまなづるへ行ったり、へいりんじにピクニックに行きました。夏には西湖に、三ぱく四っかで、キャンプに行きました。ぼくは、はじめてのりょこうでしたので、はじめのうちは、とっても心ぱいでした。でも行ってみたら、ほんとうにたのしいりょこうでした。

デンチーフ

金森　宗登夫

十周年おめでとう。

この一年デンチーフをやらせていただいてほんとうによかったと思います。ぼくはカブたちのよき先ばいになろうと考えていましたけれど、今ふりかえってみると、役にたったことといえばカブの遊び相手（カブがぼくの遊び相手？）であったように思います。開会が二時半というのは少々たいへんだったけれど、それ相当の価値があったと思います。ぼくが、わずかながらおしえるということのおもしろさを知ったのはデンチーフになってからです。「おしえることによって、おしえられる。」と少年隊の飯田隊長もおっしゃっていましたけれど、実際に体験してほんとうにそうだと思いました。

このように、おしえることはとても役にたちますが、おしえてもらうこともまた大切です。カブのみなさん、これから月の輪、少年隊へと進んでゆくとき、おしえてもらうということをいやがらないようにしてください。わからないことは、どんどん先ばい、リーダー、ときには目したのものにもおしえてもらってもいいと思います。たとえば、なわむすびがわからなかったとします。もし、適当な人がいなかったら少年隊のだれでもいいですからたずねてみてください。きっと親切におしえてくれるでしょう。それでも、よくわからなければ年長隊の人に。

このようにして、四団の各隊はそれぞれのまとまりをもつとともに、四団を一

つの家族としてまとまるようになるべきだと思います。

それでは、カブ隊、また、四団がますます発展するように。

イヤサカ！

（少年隊隊員　千代田区立一ツ橋中学三年）

三　く　み

デンマザー　里見明子

「コンニチワッ！」

土曜日ごご二時すぎ、フーフーいって坂道をかけあがってきたスカウトが、いせいよく庭に飛びこんでくる。まあまあ少し落ちついたら？　と思うまもなく、野球だ、くちくすいらいだといって仲間をつくる。

三組はだれがいるかな。真中で大声をはりあげ元気良くとびまわっているのは、そう、副組長の高橋君。小柄だけどそれだけすばしこい。おばけ屋敷やかぶと虫が大好きだ。虫を目の前においてじっと見つめている時は、何をいっても聞こえない。きっと虫の話がわかるのでしょう。鉄棒のそばにいるのは――仲良しの御堀君と龍君のコンビ。学校も組も同じ、お家も近くでおはしみたいにいつも一緒。伊東のキャンプではホームシックにかかった御堀君も今年はもうシカ。二人とも本当にりっぱなお兄さんスカウトになりました。あんまりおしゃべりしないけど、

とても素直でスマートです。つぎに肩をゆらして、門をはいってきたのは田中君。からだは大きいけれど甘えんぼう。はじめは一人でこられなかったのにいつの間にやらもう一人で――――。プラモデル・しゅりけん・リリアンと何か作るのが大好きです。そのあとから「コンチワッ」と元気よくあいさつしたのは清滝君。どんな時でもスマイルを忘れません。スポーツが大の得意でお兄さんスカウトも負かします。今はあんまり張り切りすぎて、竹うまから落ち足首をくじき、すこーし静かにしてますが、楽しいおしゃべりと笑い声はいつもと同じです。佐藤君はどこかなー、お砂場にいました。清滝君と同じウサギだけど、二人はちょうど良い対しょうです。あばれることより家の中でやることが大変じょうず。作文・カード作りにはいつもびっくり。こんどは誰かな……「あら遠藤君片うでは？」「お兄ちゃんとへいから飛びおりたら、ころんで鎖骨（さこつ）にひびがはいったの」と左腕を制服の中につってやって来ました。その不自由さも忘れ、ふうせん割りをすると、いつものように張り切ってしまいます。もうそろそろ二時半、組長の杉田君がやって来るころです。遠い深川からの道のりを、雨の日も風の日も、通って来ます。ホラ、ロケットみたいに走ってきたでしょう。どんなことにも自信をもって、先頭きって進んでいく元気なスカウトです。デンマザーがいなくても、きっとしっかり組をまとめてくれます。

ピーピッピッピッピッ！　ふえの合図で、さあ集会がはじまります。

くま　杉田憲彦

僕はカブに入って今年で四年目になる。その間、ずいぶんいろいろなことがあった。

お正月の日の丸大行進、いつも寒かった。足がいたくなるほど歩いた。神宮外えんからしぶやまで、日比谷から都ちょうまで、大ぜいの人が僕たちのことを見ていた。

春・秋の、バスピクニック、夏のキャンプ、野原でやったバーベキュー。フーフーいいながら登った高い山々、大きなつり橋をぐらぐらゆらせながらスリルをあじわったおく秩父、湖を船でわたったこともあった。

テレビにも何回か出た。「みんなの歌」の一番組に出たときは、一ケ月も毎日続いて、大いそでさつえいした時の行進がうつった。家中で毎日たのしみに見ることができてとてもうれしかった。

しかになった時、三組の組長に選ばれた。一生けんめいにやった。ひで君（弟）も一組に入った。東京全部の、カブ、ボーイスカウトが集まって、としま園で合同くん練大会をやった。フウセンわり、テント作りの競争、レンジャー部隊のいろいろな、きょうぎ、一日楽しく遊んだ。

四月からは僕も、月の輪、そしていよいよボーイになる。カブのことを考えていると、みんななつかしい思い出だ。これからも、一生けんめいがんばってやろう。

高橋忠生

十八ページをごらんください。

くま田中直也

ぼくは、かっぱつで楽しいカブがすきです。それに、クリスマス会や、新年会もやるのでとっても楽しいです。ぼくがカブにはいったのは、三年生の時です。それから二年かよっています。休んだことは、ほとんどなく、病気のときくらいです。でも、すきなところだけでなく、きらいなところもあります。たとえば、キャンプにいって絵をかくときとか、冬の夜、おそくかえるというようなときです。ぼくたち四年生のクラスでも、カブにいっている子もたくさんいます。ぼくもその中の一人なので、ちょっとはながたかいです。

ぼくは、もうすぐボーイスカウトになるので、カブともおわかれかと思うと、ちょっとさみしい気がします。でも、ひにちは、まだまだあるので、今のうちにカブでがんばりたいと思います。

夏はだいすきだ
だって、ぼくのだいすきなスイカが
たべられるもの
スイカは赤くてとてもあまい
夏はだいすきだ
それに、海や山へ行かれるもの
海は、すなであそんだりおよげる
山は、朝さんぽするのもいいきもちだ
山のぼりができる
夏はだいすきだ
なすやきゅうりのおつけものが
たべられる
夏はだいすきだ

しか 倶 堀 直 輝

写真ページをごらんください。

しか 龍 茂 久

しか　遠藤　友紀雄

一年のおもいでで、さいこへいったのが、いちばんおもしろかった。みずうみで、いろいろはなしをしたり、およいだりした。そして山へのぼったら、ふじさんがみえた。そこで、おべんとうをたべてから、いろいろなはなしがあった。そして、うちにかえりました。よる、うちの中で、げきをやったり、うたをうたったりしてねました。朝、たいそうをやってからの、朝しょくには、ゆでたまごと、おみをつけと、のりでした。おひるには、うまれた月のところで、紙でにんぎょうを、つくりました。そして、カレーをたべた。

うさぎ　佐藤　一英

きょうは、にゅうたいしきだ。みんな、れいはいどうにあつまった。ネッカチーフをもらうのだ。その前に、たい長と、はたをもってカブスカウトのやくそくとさだめをいった。はじめ、ぼくはむねがどきどきした。けれども、しなければ、はいれないと思ってやった。ぼくはやりおわったあと、むねがスーッとした。しばらくみんなで話をきいていると、はいる人みんなが前へでて、ネッカチーフをもらった。ぼくはとてもうれしかった。ぼくたちは、これでカブスカウトになれたのだ。がんばろう。

うさぎ　清　滝　信　宏

きょう、はじめてカブスカウトで、りょうりを作りました。せんしゅう、きめたとおり、め玉やきと、きゃべつと、サンドイッチでした。サンドイッチには、マヨネーズとか、きゅうりや、ハムをはさみました。このように、いろいろくふうしました。め玉やきは、だいたいわれてしまったけれど、あじはおなじでした。サンドイッチはとてもおいしくできました。め玉やきは、さめてしまったので、あまりおいしいとはいえませんでした。

デンチーフ　北　原　陽　介

デンチーフをやってみてまず最初に感じたことは、僕らのいたころと変わらずにぎやかに、そして楽しく集会をすごしていることです。

三組に入ってよかったことは、みんなが僕にとてもよく協力してくれたこと。そして、みんなと仲よくこの一年間をすごせたことです。とくに、富士五湖の一つ、西湖にキャンプしに行った時など、僕にとてもよく協力してくれました。

学校が今とてもいそがしいので、あまりよくは書けないけれども、最後に、僕はもう一年みんなと楽しくすごせたらなあと思い、とても残念です。

（少年隊隊員　港区立愛宕中学三年）

凹くみ

デンマザー　新崎久美子
（現西木久美子）

仮入隊のリス達が入ってくると、今まで一番年下のカブは、少しばかり兄き気分になります。リス達はユニフォームを着るまでは、一生懸命になって、やくそくやさだめを覚えようとします。坂井君は夢にまで見て、寝言にまでいったそうです。自分がどこに立って、どっちの方向に歩けばよいのかわかるようになると、楽しいキャンプの季節です。荷物の点検日には、自分のからだが隠れてしまうほど大きなリュックをしょって、教会へきます。生まれて始めてのこんな重いリュック！　でも嬉しくって嬉しくっていつまでもしょっていたい気持、そんなカブ達を見ていると私までが、そわそわしてしまいそうです。「もう水筒に水を入れて来ちゃった」というカブ、「きのう遅くまでママがこれを作ってくれたんだ。ママはとても上手だから何でも作っちゃうんだよ」といいながら、黄色のパジャマを見せました。このカブは、いつもママをほめます。集会の時、カブブックをいれて来る袋にも、かわいらしいアップリケがしてあります。これもママのお手製だそうです。誰でも心の中では、自分のママは素晴しいと思っていてもなかなか口に出せないものです。あのカブのように素直に母親をほめて、信頼している

のには感心させられます。そして組旗は、「ママは上手だから」との言葉に皆も同意してぬってもらいました。

キャンプへ行き、まずする仕事は、なつかしいお家へ、はがきをだすことです。「お父さんお母さんお元気ですか。ボクも元気です――」「拝啓」から始まっていたりで、いろいろ楽しいおたよりです。

キャンプでは、自分のことは自分でするので、今までしたことのないこがほとんどです。ふとんをしいたり、たたんだり。自分の荷物は、いつもきちんと整理整とんしておかないと、大変なことになります。十五分間の入浴はとてもいそがしく、にぎやかです。パンツになって行くのですが、あがって来た時は鳥が水あびをしたように、びしょぬれのままで部屋へ入って来たので、注意すると、次の組に「もう時間だから早く出ろ」といわれたのだそうでした。あわてて誰かのパンツをはいて来てしまい被害者に文句をいわれて、恥しそうにしているカブもいましたが。時には大きいカブ達が、けんかをして小さいカブが、ちゅうさいに入ったりすることもあります。ぶったり、けられたり、泣いたりしても、キャンプは楽しいものです。

田浦　彰

カブに、はいった時、うちで、カブのやくそくを、覚えていた。その時、弟がきて、「おにいちゃん、なにをしているの」という。ぼくは、カブのやくそくを覚えているんだよ、といった。それからなんか月もたって、ぼくと弟と、けんかをしてしまった。そしたら弟が、「おにいちゃんは、おさないものをいたわりますって、カブの本に書いてあったよ」といったら、「だってこのまえ、おにいちゃんが、やくそくをおぼえていたじゃないか」と弟はいう。ぼくは「あっほんと、おまえがいたのちーとも知らなかったわぁ。」と弟にいわれてしまいました。これはやられたとぼくはいった。

くま　平井千明

今から二年前、ぼくたちは希望にみちて入隊しました。やさしい新崎（現西木）デンマザーにいろいろ教えていただき、ようやくスカウトにもなれてまいりました。秩父ユースホステル、伊東ユースホステル、西湖ユースホステルと今も楽しい思い出が思い出されてまいります。今年はどこに行くのだろう。カブのおたん生日をむかえて、おにいさん方に負けないように、がんばって行こうと思います。

カブ、カブは僕ら小学生の天国だ
一週間に一度の土曜日が
待ちどおしくてたまらない
カブでは、自分のことは自分でやる
もし、一人でできないことがあったら
みんなでたすけあう
これがカブのさだめだ
たい長、デンマザー、デンチーフの
お兄さんたちと、一歩一歩前進して
平和な天国をきずくのだ
今年はオリンピックが東京である
僕たち日本のカブも
外国の人にはずかしくないように
しっかりやろう

しか坂井宏

れいなん坂のカブがはじまってから十周年だそうです。ぼくはいま九才だから、

しか守戸修

ぼくがうまれた一年まえにできたのです。おおぜいのカブからえらばれてこの四団にはいれたことをうれしく思っています。ぼくたちはカブたいのさだめをまもって、じょうぶなからだを作り、ひとのやくにたつ人間になりたいと思っています。これからも、しゅうかいにはやすまずいっしょうけんめいやって、四団をみんなでりっぱにしていったらいいと思います。まいしゅうあつまってあそんだりするのがたのしみです。カブにいくと、おやつもときどきでるので、すごくうれしくなります。

やしょう

うさぎ　平　岡　和　光

ぼくは、はじめはそんなの、もらわなくてもいいと思っていました。でも、きよたきくんに、「やってみろよ。」といわれたので、じしんがつきました。そして、「しんごう」のところをやってみました。そして、できたので、「よし、もっとやろう。」と思いました。そして、「げき」のところや、「おんがく」のところをやりました。そしてカブで、やしょうをもらうとき、「どうせ、だめだ。」と思っていると、名前をよばれたのでびっくりしました。でも、ぼくはうれしかった。それで、もっともらおうと思って、家にかえってから、たくさんやった。

うさぎ　渡辺明夫

ぼくは、夏のキャンプがつまんなかったです。だって、どんぶり一ぱいだから。ふつう、うちで三ばいくらいなのです。それから、やしょうのほうは、うまくいきません。けれども四がつで、三年生ですからやしょうや、ほかのこともがんばります。

デンチーフ　針替茂人

はじめてデンチーフに選ばれてから何をすればよいのかわからなかったが、僕はカブスカウトからあがってボーイスカウトにはいったので少しはカブスカウト時代のデンチーフのやっていたことを思い出してやってみた。なんとかうまくいった。キャンプの時はとてもゆかいだし、ボーイスカウトにくらべると気楽でいいがカブスカウトの子供たちを指導するのは、たいへんだった。これは大きくなってからも特に役にたつにちがいないと思った。これからデンチーフになる人もたいへんな経験を持たなければならないけれども指導力がつくのはよいと思う。これからのカブスカウトをたのしくやれるように次のデンチーフにたのみたい。僕たちがカブスカウトの指導計画を思うようにやれなかったのは残念だ。

（少年隊隊員　慶応義塾普通部二年）

五　くみ

デンマザー　持地　梓

君たちがカブの五組に入ったときのことおぼえているかな？　去年は四人の新しいお友だちをむかえて、あわせて八人。「ネェ、デンマザー」「オイ、××君」とほがらかに仲よくニコニコ。あれからもう一年。そして入ってきたカブの一人一人が作ってきた五組も十年目。本当に早い。五組の元気な君たちが一生けんめいに脳みそとからだを大きくしていくのをみると、デンマザーはうれしくて「エヘヘ……」とよろこんでしまうのです。この間、みんなの体重をきいたら三十一キロの清瀧君が一番。本が大好きで「あのネェー」ではじまるはなしが上手。げきのきゃく本をかいたり、ぎろんをしたり五組の字者様。お休みをときどきするのが残念。二番目は二十九キロの飯泉君、目がまるくてポコチャンみたい。なんでもはっきりものがいえるのはいいことよ。キャベツのせん切りのうまいのにはデンマザーも目がまるくなってしまいました。二十八・五キロの大木君は名前と同じにせも大きい、気はやさしくて力もちの通りほんとうに五組のよい兄き。力もちかどうかは君たちでためしてみてね。ナンバーフォアのとう板は、二十八・一キロ。スポーツマン石川君。スポーツできたえられるということはよい人間をつくるといいます。小つぶでも大声でみんなをビリリ。デンマザーをたすけてく

れます。笑いじょうごの信田君は二十六キロ。今年四年生。せは高くスマート、甘えんぼうの、ときどきハリキリボーイ。君のトランプ手品のたねあかしは今でもわからない。マンガのような小玉君。二十五・九キロ、君がはなすとわらってしまう。何か発表するときの君の頭は大かいてん。その工夫力を大事にしてね。それからイスがあるときはすわってください。二年生の福岡君と手塚君、学校も同じせも同じ。ちょっとふとっているのが手塚君。キャンプでは、ベットからおっこちてデンマザーをびっくりさせたけど大きいカブにまけず、ほんとうにがんばった。やろうと思えば何でもできるね。野球博士の福岡君。小さいけれども、かけっこは早いし、なわとびも上手。も少しじょうぶでながもちするカブになってほしいな。がんばれっ。脳みそとからだが「いつも元気」というのは、すつかしいね。カブでけいけんしてきたことを大事な宝物にして、そんな時に、やくだててほしいなと、デンマザーは思っています。早く大きくなれ！　五組の君たち。

くま　石川　圭一

ぼくは、毎週土曜日になるとカブスカウトに行く。場所は、ふくよし町のれいなん坂だ。ぼくがカブに行くと組長だ。小さい人たちをいたわらなければいけないが、なまいきだとついどなってしまう。だから、そういうところを、なおさなければいけない。まえに、みんなとやくそくしたが、それがまもれていない。なおそうとしても、つい、いってしまう。ぼくがやすむと、ふく組長の清たき君がやる。でも、清たき君は、ほう告をするのをなれていないから、ときどき、しっぱいするらしい。手塚君と福岡君は、小さいが、なかなか、なまいきだ。小玉君は、ちょうしがよすぎるし、ふざける。大木君は、きちっとしているが、ときどき、ふざける。清たき君は、いたってのんきだ。いいずみ君は、すこしふざける。信田君は、よくわらう。ぼくは、四月から、わかれるから、たのしくやりたい。

くま　清滝　昌哉

ぼくは、副組長だ。組長は、たよりになる石川君だ。しかし、時々休むのでこまる。初めて石川君が休んだ時などは、まごついて、けい礼したまま「五組、集合終わり。」といってしまった。しかもその日は組ばこのペンキぬりの日だった。ペンキを買ってくると、みんなは、「ぬらせて」といってきかなかった。そこで

ぼくは順番を決め一人ずつやらせた。ペンキをつけすぎたのでたれ落ちてしまった。そこで、それと同じ色で点をつけ、もようにした。次の集会で見せたら、「うまい」とほめられた。組長も、デンマザーも、デンチーフもいなかった時のことなので、ぼくは、おおいにとくいになった。ぼくはその時から、みんなにやらせると、みんな不平をいわないということに気がついた。

うれしかったこと

くま　大木　勉

カブスカウトに入って一番うれしかったことは、西湖のキャンプです。初めてお友だちといっしょにねたり、キャンプファイヤーをしたり、いろいろおもしろかったことばかりでした。もう一つは、食事を作る時です。おいしくできた時は、とてもうれしいです。矢章がだんだんふえている時もです。

つらかったこと

くま　小玉　純康

ハイキングに行ってたくさん歩いて足がいたくなった時です。

こんど、デンマザーがやめることになった。そこで、どこかに日がえりで行っ

てこられる、りょ行へ行くことになった。そこで、おかあさんやおとうさんに、そうだんをして、百草園へ行くことにした。ぼくは、いそいで石川君の家へ電話をしたら、「うん、いいよ。」といったので、そこへ行くことにした。それから、時間表を見て、よていをたてたのだけど、うまくいかなかったから、こんどの組しゅう会で、きめることにした。ぼくは、けっかの出るのがたのしみだ。

しか　飯　泉　真　行

去年の十二月の二十六日と二十八日に、スケートへ行きました。二十六日の日は、時間がすこしおそかったので、オートバイで行きました。むこうへいってから、スケートぐつをはいてすべりはじめました。はじめはあまりすべれませんでした。それからまたすべっていると、隊長が、「飯泉君、なかの方でやったほうが、うまくなる。」といったので、なかの方でやってみたら、ほんとうにうまくなりました。

二十八日の日は、都電で行きました。その日は、あんがいうまくできました。それから、すべってまもなくすると、おわりのふえがなりました。それから、くつをぬいで帰りました。

しか　信田　雄一郎

三月十九日八時四十五分にタワーバスにのって港区めぐりをしました。はじめに、東京わんに行って船を見ました。大きな船がゆれていました。つぎにバスにのってあたご山に行きました。あたご山はかいだんがかぞえられないくらい高いのです。また、中にはすばらしいラジコンやほんとうに空をとぶヘリコプターもあります。つぎに区やく所にいって、おじさんの話をききました。かえり、バスの中でカメラを友だちといっしょにうつしました。その友だちは学校をやめて、いなかの学校へ行くので、あざぶ小学校をきねんにとっていくといって、いろいろとっていました。

うさぎ　手塚　真

ぼくが、カブたいに入ってもう一年になりました。はじめのころは、なんにもわからないことが、いっぱいで、時々行くのがやなこともありました。でも、キャンプに行ったりして、たのしいことがいっぱいなので、今は、土よう日がまちどおしいです。友だちともなかよくして、いいことをたくさん、おしえてもらいおりょうりをして、みんなとたべたり、ピクニックにいったり、うんどうかいをしたり、たのしい一年でした。これからも、友だちにまけない、いいスカウトになりたいと思います。

うさぎ　福岡文裕

ぼくは、きょ年カブスカウトにはいった。はいったときはとてもうれしかった。二年二組の手づかくんもはいった。手づかくんとぼくはふたりとも五組にはいった。五組には大木くんとか、いいずみくんたちもはいっていた。十二月には、おりょうりをつくった。そのときはとてもたのしかった。また、ことしの二月にもおりょうりをつくった。そのときはじぶんでじぶんのたべるものをつくったのでとてもおもしろかった。めだまやきをつくろうとしてたまごをわったら、たまごのきみとしろみがめちゃくちゃにこぼれた。手づかくんは、「ワッハッハッ」とわらったので、石川くんもわらいだした。しまいには、みんなわらいだしたので、ぼくはとてもおもしろかった。

デンチーフ　川田裕人

思い出というものは、いいものである。思い返すたびに楽しかったことを思い出すことも出来るし、悪かったことを思い返して反省して、自分を進歩させることにもなる。

ぼくがカブに入ったのは、小学校の四年生の時だった。今から思うと、二年生の時に入れなかったのが残念である。ぼくの家の、となりの家のぼくと同じ年の

人も入っていたが、なぜか、それから、少ししてやめてしまった。入ってからは、五組に入れられた。デンマザーは、持地さんであった。いたってわがままなぼくは、なかなか、カブの団体生活になれないで、だいぶさぼってしまった。いい忘れたのだが、五組の組長は、佐脇君だった。そういえば、佐脇君と一回だけ大げんかをやった。わがままなぼくは、佐脇君に、なまいきだといわれて大げんかをした。その時、ぼくは、負けたが、それ以後は、やっていない。佐脇君とは、今ボーイスカウトで一番仲良くしている。

では、話をもとへもどす。そんなことで、四年生の時は、さぼりが多く、五年生になってカブ隊の「クマ」というものになった。「クマ」になると、すぐに、月の輪になった。月の輪は、たのしかった。ものすごくたのしかった。ぼく達のリーダーには、野儀さんと小林さんがなった。たのしかったのだが、キャンプの前のことは、ほんとうにチートモおぼえていないのである。よほどキャンプが印象深かったのであろう。キャンプは楽しかった。ぼくは、「助けてえー、助けてえー。」という。ねずみちゃんというのをやって、それが大はやりしたりした。（少数の方はごぞんじでしょう。）ほかにもたくさんおもしろい仲間がいた。それに、サークルファイヤーで、「村のおじぞうさん」というので、げきをした時どろぼうの役で、それはいい役だった。野儀さんとも仲良くなった。キャンプファイヤーでは、「ある日のあるカブ隊」というのをやった。それは好ひょうで、

みんなもよろこんでくれた。しかし一番印象深かったのは、やはり、あの「おばけ屋しき」であろう。それは、だれもいない家にみんなで行ったことである。

こんな簡単なことで思い出とするのは、カブさんたちに笑われるかもしれないが、ぼくにはこれ以上書けないようである。最初に書いたように、ほんとうに思い出というのは、いいものである。だから、カブの生活を効果的にくらせばとてもよいと思う。

（少年隊隊員　お茶ノ水女子大附属中学二年）

編集のおわりに

門松のころに始まり、寒椿のころ皆様に原稿をお願いし、菜の花のゆれるころ本の姿があらわれ、桜のころにできあがりました。

急な原稿のお願いに快よく応じてくださいました皆様に、また見えない力でなれない私たちを助けてくださいました方々に心からお礼を申しあげます。本当に有難うございました。

この「あしあと」に記された思い出をたどって、どうぞまたこの坂道をのぼってきてくださることを期待しております。

風変わりな記念誌をだすために、むずかしい印刷のことをお引き受けくださった印刷社の金森さんご一家に感謝をいたします。

おわりに、四団を「さようなら」するデンマザー一同が、記念すべき十周年の仕事の一端を受け持たせていただけましたことを、うれしく思っております。

（デンマザー一同）

創立十周年記念誌

編集者　高島拡子・萩原昌子
里見明子・西木久美子
持地梓

印刷所　三響社
電（二九一）四九七四・五

発行者　ボーイスカウト
東京第四団年少隊
東京都港区赤坂霞南坂町十四

昭和三十九年四月二十九日

リーダーのれきし

年度	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39
長	志水	杉原									杉原
長										野儀	野儀
長補	杉原 遠山				川崎 道下			野儀 加藤	日下部 市川	古矢	古矢
付		高橋 宇田	川崎 道下		白井	野儀 日下部	岩見	関口 渡辺		万石 斉藤 戸田	万石 戸田
マザー		大和									渡辺（高島） 萩原 里見 新崎（西木） 持地
					渡辺（現高島） 萩原 里見 井出（現頴川） 新崎（現西木） 佐久間（現八木）	持地					
ンチーフ	大浜 九鬼 押原 小林 木下	落合 井上	下河辺（史） 小川 吉田 白井	◦日下部 柳 大島	宮崎 平木 鈴木 下河辺（晴） ◦加藤 ◦古矢	竹村 塩崎 戸倉 田 望月 稲葉			茅島 汁 増田 村田 月上	高田 金森 北原 針替 川田	

ボーイスカウト十周年記念誌

東京第四団年少隊